
ちょ！勝手にっけんな？

苦労度MAX!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちょ！勝手につけんな？

【Nコード】

N6475X

【作者名】

苦勞度MAX！

【あらすじ】

老衰でやつと死んだら、暇つぶしに転生させられるらしい。

俗に言う、チート転生原作ブレイクだ。

強制的に。

しかも、余計なチートがついて来て……。

どうなる？俺？

処女作です。駄文です。チート転生、原作ブレイク、ご都合主義、他にも新たに出てくるかもしれません。苦手な方は引き返して下さい。

一応、R - 15と残酷な描写タグを付けておきます。

覚醒／強制／転生（前書き）

最初の2、3話はプロローグ的な物にしようと考えています。
それではどうぞ！

修正しました！

覚醒／強制／転生

覚醒／強制／転生

目が覚めた…。

目が覚めるとそこには……。

「知らない幼」 「そういうのいないから。」……。

被せて来たよ、この幼」 「幼女って単語を思い浮かべたり言ったら、お前の（Hな）秘蔵コレクション燃やすぞ（憤怒）」

ナンテコツタイ＼（＾o＾）／
って

「なんでそんな事を知ってるんだ？」

しゃああ……。

「だって神だもん」 （ ）

なんか水っぱいのが降って来たら機嫌直ったぞ、あれ？動けない？
というか、切り替え早いな……。って、神？かみ？K A M I？

「……………髪？」

「ノンノン♪神？」

「…………マジ？」

「Yes、I'm GOD！」

「……………なんで俺は神と喋ってるんだ？」

「You！転生するから特典あげるよ」

「……………これが最近話題のチート転生、それと、スルースキルか。」

「どっちも普通だと思うよ。それと、君の方が冷静過ぎると思うよ？」

「いや、だって、俺、死んだし……………」

「うんうん。死んだ事は理解出来てるね。

……………確かに君は小・中・高をなんの障害もなく進学して大学も志望通りのところに決まり、大学卒業後、独立し会社を立ち上げ、その才能をいかに発揮し、世界の中でも五指の中に入るほどに成長させてから、女の子7人……………確か、年上のおっちょこちよいのウェーブ掛かったロン毛爆乳お姉さん、内気な三つ編みお下げの貧乳眼鏡っ娘に、年下短髪俺っ娘ロリ食いしん坊、お兄ちゃん大好きツインデレデレ巨乳義妹、ツンデレ金髪ロリっ娘S気質お嬢様、更に、無口無表情銀髪で君のこと大好き僕っ娘美少女と、黒髪ストレート泣き黒子つきノーパン主義のDMメイドさんを心身共に落としてハイレム作って、老衰で死ぬまでの92年間ずつつつと「やめて！俺のライフ（という名のプライバシー）はもう0よ！！！！！」

「良いじゃん。減るもんじゃないし。」

／／／／＼テヘッ by 作者)

「……要するに、ヒマだからちょうど監視していた人間の魂使って、チート転生物の原作ブレイクをしたかったと？」

「うん。」

「最初のアレ→はなんだったんだ？」

「ゴメン。機嫌悪かった。だって…、」

「だって？」

「女の子の日だったんだもん テヘッ」

「」

「じゃ特典決めて。デフォで君、原罪無いから。」

「はあ？なんで？」

「私特製『バキューン』汁でついでに流したんだよ／＼／＼／＼／
／／」

最悪だ……。まさか神（見た目5歳の少女）の『バキューンバキューン』で原罪を流されるとか……………。

「何時の間に？」

「私の機嫌が治った時だよ」

……………あああれかあああああああああああああああ
あ！！！！

なんか降って来たと思ったら、こいつの『見せられないよ！』だったのかあああああああ？

覚醒／強制／転生（後書き）

「作者あ！」ドゴン！

な、なんでしよう？

「なんで俺の名前が？？？なんだよ！」

だって君一回死んでるから前の名前は消されてるっていう設定だよ。

「なら次の名前はあるんだろうなあ…。」

モチノロン！だから戻って戻って。

「分かった…。」

それでは皆様！

「次回また会おう（いましょう）」

皆様からの御意見、御感想お待ちしております！

設定／暴走／転生？（前書き）

この話で主人公がやらかします。
性的な意味で。

「おい！お前が書きたかったただけだろ絶対！！」

当たり前だ！！！！ クワツ！！

「コイツ最低だ？コイツ最低だ？」

修正しました

設定／暴走／転生？

設定／暴走／転生？

あの後なんとか自分を落ち着け、一段落ついたところだ。まさか神様とはいえ、見た目5歳の少女の『P i ————』を顔面に受ける事になるとは…………。

「まあとりあえず、能力の設定しちゃおう！」

なんでコイツは動揺とかしないんだ？（神だからに決まってんだろΣ、（´o、；by作者）

「なんでも良いのか？」

「うんうん。ただし、原罪が流されてるから君、不老者だから」

不老って……。生半可な覚悟じゃ無理だな。化け物に見られるし、何より自分と関わった人間が死ぬのを見るしか出来ないってかなりキツイな。

「……………分かった。じゃあまずは、“容姿”と“肉体”をシャーマンキングのハオの物にして、身体を鍛えられる時間と環境をくれ。」

「おっ、痩せマッチョになる気ですな」

「（イラッ）出来ないのか？」

「出来るよ。ハイ！」

「……なあ、「容姿」と「肉体」って言ったよな。なんで「巫力」がついて来てんだよ！」

「ついでに、それを引き出せるだけの経験と技術と私お手製の持ち霊も捻じ込んでみました〜！」

[illegible]

俺は突然の激痛に思わず倒れこむ。情報量の多さ、密度、経験が1000年分全てほぼ同時に入ってしまった為に脳が拒絶反応を起こし、全身を襲う！

「ヤバッ、脳の許容量超えちった？」

俺は鼻血が止まらず、目も充血して白目の部分が完全に紅に染まって血涙を流している。血管がまるで侵入^{はい}ってくる膨大な情報から逃げ出そうとするかの様に流動し、脈動し、八切れんばかりに膨らみ限界を超えたところは完全に皮膚を引き裂いて出血している。

.....

「痙攣しちゃってるよ。どろしよ。」

神はもう涙目である。

どの位時間が立ったか分からない。気が付くと視界がボヤけていたが、何度か瞬きを繰り返しているうちに慣れる事が出来た。全身の出血や激痛はもう感じなくなっていた。治療された……、というより、元から無かったかの様に綺麗さっぱり消えていた。怪我は神が治したのだろうが、俺はかなりアタマにキていた。

……………限界だどうしてくれようこの少女（憤怒）字余り

「」

ゆらり……と、普通なら無理な体勢で俺は起き上がった。例えて言うなら、前のめりに倒れたのを逆再生したような感じだ。

「あつ！気が付いた、ひっ！」

視線が合った。神……、否、少女が怯えている……。多分、目が据わっているからだろう。

「オイ……。」

何故か片言だが今はどうでも良い……………。

「ななななな何かな？かな？」

目の淵に涙が溜まっている。ひぐらし化してる。ケド、モウ、ヨウ
シャシナイ。

「イタダキマス。」

「へっ？」

ルパンダ~~~~~イブ！

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや！！本能のままに
何しちゃってんのオレーーーー！！！！確かに馬鹿な事やられてキ
れたのは良いけど、神様とは言え、見た目5歳の幼女をおs…やr
…手籠めにしちゃダメだろーーーー！！！！どーしよどーしよど
ーしよどーしよどーしよどーしよどーしよどーしよどーしよど
ーしよどーしよどーしよどーしよどーしよどーしよどーしよど
ーしよどーしよどーしよどーしよどーしよどーしよどーしよど
ーしよー！！！！

しかも！途中、理性があつてそのまま、チートの設定してたし、ア
ホかーーーー！！！！

という事は

これで俺もペドフィリアの仲間入り？！犯罪者？！ロリコン？！確
信犯？！情状酌量の余地なし？！e t c e t c ……。

と、ベットの端（何時の間にかあった）に腰掛け両手で頭を抱えて
悶えていると、

「あの……。」

ビクッ！？！？！？

起きちゃったーーーー！！！！

元凶であり、被害者であり、神様な、5歳の幼女が起きちゃったー
ーーーー！！！！

神はシートで慌てて身体を隠すと、赤く染まった頬と涙目で、

こう言った。

「…………このまま送りますね。」

「はい？」

ボタン！……！

/

「はい？」（――）？

下から不吉な音がした。

下を向いたら穴が出来てました。

\

綺麗な海がありました。

ヒューーーー……。…。

落ちました。

まずは一言。

「ごめんなさーーーーーい」
(T T)
(T T)

設定／暴走／転生？（後書き）

「おい……。言い残す事は……。」

反省はしている。だが、後悔はしていない！

「なら死ねえ！！！！！」

ぐはっ！！

……フッ。

我が変態人生に一片の悔いなし！！！！！！！！！！

「名台詞を汚すんじゃないねえ————！！！！！！！！！！」

というわけで

「「再見！！」」

そうそう、次回の初っ端からお前の名前出るから。

「へっ？」

初O・S / 現状把握 / 手紙（前書き）

遂に主人公の名前が明らかに！

案外あっさりとぶちまけます。

「俺は別に良いけど、この小説的にはどうなんだ？」

完璧OUT。

「ダメだろ！！」

それではどうぞ！

「無視すんな！俺が主役だろうが！！」

初O・S / 現状把握 / 手紙

初O・S / 現状把握 / 手紙

やあみんな！元気！？

前回、ハオの肉体を使って、晴れて犯罪者の仲間入りをした男、
麻あさ
倉葉真くらやまだよ！

お兄さんの今の気分？

……………うん！お兄さんは今とってもハイ（・・・）だよ！

どの位？うーんとそうだね…。

上空約7500mからパラシュート無しのスカイダイビングをして
るくらいさー！

何時の間にか着ていたマントが、バタバタバタバタバタバタバ
タバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバ
タバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバ
タバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバ
タバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバ
…。
…。

というわけで、

「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！！死ぬ
うううううううううううううううううう！！！」

死後、黒歴史とプライバシーを晒され、
転生前から性的にやらかし、
怒った神様に物理的に落され、
転生初日の初登場からピンチな状況。

詰んだ？

いいや！まだだ！まだ終わらんよ！！

俺はもう一度やり直すんだ（・・・・・・・・・・）！

こんな所で死んでいる場合じゃない!!

「O・S!!」

俺は

「in , AIR!!!!」

持ち霊を呼び出してみた。

バッチャーーン!!

……………腹パンした。おエッ。

~~~~~しばらくお待ちください。葉真は絶賛リバーズを行っております。~~~~~

吐いてすっきりしたので、現状把握。

まずは俺。ハオのマントに、ハオの服の蒼verを着ている。手袋と靴も服に合わせて青い物になっている。ピアスはしていない。ついでに神から貰ったチートの中にある「完全記憶能力」「絶対記憶能力」「瞬間記憶能力」を確認した。

……問題なく前世の記憶もちゃんと残ってる。

次に状況。俺in掌の中。何の？持ち霊の。持ち霊は何？多分、あいつのお手製の精霊、水の精霊みたいな名前だと思う。全身水で構

成され、よく見ると、川の様な流れが出来ている。上半身の胸部にひし形の金色のモニメント、その中心に蒼い宝石が嵌めてあり、人間の二の腕部分に角錐の黒い縞模様の入った物体が付いていて、角錐の頂点のような所から湧き出すように水で出来た腕が出てきている。指は丸みを帯び、例えるなら、膨らましている途中の風船を全部の指に付けている様な感じだ。胴体から腰部分にかけて身体は細くなっているが、足の付け根にあたる部分は横に伸びている楕円形になっており、そこから足の様な物が蛸の足と同じ様に生えていた。頭部は蛇をモチーフにした様な仮面を付け、葉脈の様な形の水が後ろになびく様に伸びている。

……カッコイイと思った俺は正常だと願いたい。

最後に現在の所持品の確認をする。神に何処でも使えて、何時までも使えて、絶対に壊れない様に魔改造してもらったi。hone、そして、ハートのシールで封がされている手紙だった。

俺はとりあえず、とりあえず手紙を読んでみる事にした。

## 初O・S / 現状把握 / 手紙（後書き）

というわけで主人公の名前は麻倉葉真です。

「馬鹿だろ。能力がシャーマンキングで、名前が麻倉って、答えどころか、この小説のネタバレじゃないか!!」

大丈夫だ。問題ない。

「何処がだ!」

それより読者の皆様に挨拶!

「!...分かってるよ!ゴホン!

改めまして、この小説の主人公を務めさせていただきます、麻倉葉真です。

読者の皆様に楽しんでいただける様、この駄作者と共に一所懸命頑張りますので、よろしく願います!!」

それでは読者の皆様!

「「アリーヴェデルチ!!」」

御意見、御感想お待ちしております。

## 驚愕／放浪内容／遭遇（前書き）

今回、作者の好きなキャラが出てきます。

「…………変態が。」

うるせえ、前科持ち。

「ぐっ…、言い返せねえ…！」

「第4話じゃ！心して見るが良いぞ…！」

## 驚愕／放浪内容／遭遇

### 驚愕／放浪内容／遭遇

神からの手紙を自分の持ち霊の掌の中で読む事にした麻倉葉真です。

手紙の内容はとんでもない物でした……。

まず俺のいるこの世界についてだ。なんとあの「魔法先生ネギま！」の世界に転生させられた。俺としてはネギをなんとかして一般人レベルの常識が身に付けられる様に教育したい。

時代は原作の100年前、場所は魔法世界のエリジウム大陸のケルベラス大樹林にある、原作でネギと茶々丸が辿り着いた綺麗な湖の真ん中に落ちるようになってやがった。落ちる時に見えた海は場所と世界を特定させない為のフェイクだったらしい。

チートについてだが、

あえて言おう……。

ちょ！勝手につけんなー！

（やっと言えたね！by作者）

.....。

…チートの一覧が次の物だ。

・神を（性的に）喰ったので、巫力がハオの10倍（1250万）に強化されている。

……この時点で俺はシャーマンキングで言う「神」として世界に認識される。

・巫門遁甲で全ての攻撃を受け流す事ができる。

つまり、ナギの魔法やら、タカミチの居合い拳といった巫力を用いない攻撃が受け流せる様になった！！

・瞬間記憶能力、絶対記憶能力、完全記憶能力。

スピリット・オブ・ウォーター

・S・O・Wの霊力は90万。O・Sした場合、巫力の無い人間でも見えてしまう位、O・Sとしての濃度が高い。俺自身が神を（性的に）喰ったから、あらゆる存在を取り込めるようになった。精霊よりも、神クラスの精霊王の方が正しく、能力は、全ての水と水素を操る事。あと、怪我とか病気も治せるらしい。

・シャーマンとしての精神の強さは「神を（性的に）喰べてしまう位、強い胆力と、揺るがない心」……。

・神を（性的に）喰ったのでマイサンが神聖なモノ（・・・）になっている。

・「神」に成っているので、不死と超速再生が追加された。

（性的に）が多かったけど、気にせず。

原作ブレイク楽勝じゃね？

そして、一番とんでもないのが、あの神、

俺に惚れやがった。

しかも、

妊娠してた……。

……子供の身体じゃ無理だろ！と思っていたら、写真が付いていて、あの幼女を大人にした様な妊婦さんが写っていた。

……あれ？警棒と手錠と令状を持ったお巡りさんがこっちに来るよ？  
わっ！にっげろっ！……。

おお！主人公よ！完全に壊れてしまつとは情けないwwwwwwb  
Y作者

因みに、子供はあつちで育てるとの事……。

もし死ねたら、顔でも見に行こう…。

といった感じで、親としての決意と覚悟を固めて、なんとか気持ちを切り替え、身体について説明する。

既に筋肉が付いている状態だった。これはかなり、嬉しい。それでもシャーマンとしての修行と、肉体の鍛錬はやるけどな。

さらに肌の色が、まさに美白！と呼べるまでに白くなっていた。恐らく、神の趣味だと思っておく。

…さてと、とりあえず……。

放浪するか！

キングクリムゾン！！（８０年経過）

あれから８０年くらい経った。今は原作の２０年前ぐらいだから、大戦争がそろそろ起こると思う。えっ？８０年も何してたか？

スピリット・オブ・ウォーター

んーと、まず魔法世界の辺境の村とか行って、スイ……Ｓ・Ｏ・Ｗの名前ね。で、そのスイの能力で怪我人とか病人を助けたり、紛争地域の子供やその両親、その他大勢をアリアドネーやら、帝国の安全地域に避難させたり、彼らの食料を搾取する、自称“立派な魔法使い（笑）”をＯ・Ｓのスイの能力で生きたまま木乃伊にしたり、逆に水分を過剰に挿れて、水中毒で殺したり、増援部隊を、そのまんなま圧倒的な水量（攻撃が終わった後の場所が湖になった）で押し流したり、圧縮した水の弾丸で弾幕ごっこしたり、色々やってたら、ＭＭの糞野郎共からは「人間洪水」、「激流弾幕」、「水の巨人を従える王」、「水霊皇帝」、帝国からは「歩く癒し水」、「白き聖水」、「水の救い手」とか小っ恥ずかしい二つ名が付けられていた。ＭＭの糞老害共が俺に掛けた賞金は５０００万\$というバカみたいな金額になった。

一般人の反応は、亜人、人間を問わず良好な物だと言える。ＭＭ市民も元老院の嘘情報は信じず、かなり良い印象を持っているらしい。

やっぱり人間に最も求められるのは、信頼、ですね。

えっ？そういえば、俺が今なにしてるかって？

「おい！てめえ！動くんじゃねえぞ！」

「見られたからにやあ、消させてもらうぜ！」

「ふござ！ふがござがござがござ！（おいっ！妾の事は良いから早く逃げるのじゃー！）」

猿轡と縄で縛られた帝国の第三皇女、20年後には素敵なおっぱいになる可能性を秘めた褐色角付きお姫様テオドラと、その帝国の第三皇女を誘拐したと思われる、ロリコンでペドフィリアな変態の魔法使い4人組に殺され（笑）かかっています。

犯罪者は潰す…。

## 驚愕／放浪内容／遭遇（後書き）

「というわけで、帝国の第三皇女、テオドラが出て来たわけだが…」

テオドラ、来たあああああああああああああああああ！！！！

「作者の奴が完全に壊れてしまったのじゃ。葉真、どうにかするのじゃ！」

「無理。」

「即答?!」

「それでは。」

「「また次回！（なのじゃ。）」「」

御意見、御感想をお待ちしております。

## 詳細／設定／ネタバレ（前書き）

今更ながら、主人公の設定やネタバレです。

「ほんと、今更だな。」

それではどうぞ！

加筆修正しました！

## 詳細／設定／ネタバレ

詳細／設定／ネタバレ

名前

麻倉葉真  
あさくら じま

この小説の主人公であり、神を喰らい、チートを超えたチートを持つ事になった哀れな転生者。

チート一覧

- ・神を（性的に）喰ったので、巫力がハオの10倍（1250万）に強化されている。

この時点でシャーマンキングで言う「神」として世界に認識される。（巫力が50万以上のシャーマンは「神クラス」と呼ばれる。）

- ・完全記憶能力、絶対記憶能力、瞬間記憶能力。

- ・巫門遁甲で全ての攻撃を受け流す事ができる。

つまり、ナギの魔法やら、タカミチの居合い拳といった巫力を用いない攻撃が受け流せる。

- ・S・O・Wの霊力は90万。  
スピリット・オブ・ウォーター

O・Sした場合、巫力の無い人間でも見えてしまう位、O・Sとし

ての濃度が高い。

主人公が神を（性的に）喰ったので、あらゆる存在を取り込めるようになった。

精霊よりも、神クラスの精霊王の方が正しく、能力は、全ての水と水素を操る事。

あと、怪我とか病気も治せるらしい。

・シャーマンとしての精神の強さは「神を（性的に）喰べてしまう位、強い胆力と、揺るがない心」。

・神を（性的に）喰ったのでマイサンが神聖なモノ（・・・）になっている。

・「神」に成っているので、不死と超速再生が追加された。

原罪が流され、不老と聖人並みの身体能力、俗に言う“細マッチョ”と呼ぶにふさわしい肉体を持つ。

現在（第4話）、誘拐されているテオドラと遭遇、誘拐犯を潰す準備中。

前世ではハーレムを作ったが、実は転生は二度目。最初の人生は享年25歳。トラックに引かれ、死亡。気が付いたら赤ん坊になっていて、二度目の人生を謳歌する。享年92歳。そして、神に転生させられて、現在、約80歳。合計197歳。

神との間に子供を作ってしまった。本人は死ぬまで会えないと思っているが、神になっているので、簡単に会いに行ける。

第4話時点で所持品は魔改造したi。hone（充電不要、ネット

繋ぎ放題、ウイルス対策として最新式のファイアウォールやウイルスバスターを突っ込み、太陽に突っ込んでも壊れず、防水も完璧。）、神から定期的に送られて来る手紙と写真（子供と一緒に写った物）、80年分、替えの服とマント（自作の亜空間の中に仕舞っている。）、そして、少しのお金（日本円で500万円）と明日のパンツ（蛇が描かれた勝b…、柄パン）。

所持金は賞金稼ぎや“立派な魔法使い（笑）”から、カツアg…もとい、貰った物。

詳細／設定／ネタバレ（後書き）

「こんな設定で大丈夫か？」

大丈夫だ、問題ない。

筈だ！

「筈なのかよ！」

近日、更新します。

少々、お待ち下さい。

## 戦闘／恐怖／旗立（前書き）

明日テストだけど更新します。  
初の戦闘シーンでもあります。  
これが俺クオリティ。

「阿呆の極みだな。」

ひどくね？

「普通だろ。」

喋り方コロツコロツ変わる癖に。

「お前の力量不足だろう？」

幼女とのフラグの立て方が異様なんだよ。  
前科持ち。

「いい加減そのネタしつこいぞ？」

それでは第5話です。どうぞ！

初の戦闘描写です！

## 戦闘／恐怖／旗立

戦闘／恐怖／旗立

「O・S！（オーバーソウル！）in / AIR！（イン、エアー！）」

俺はスイを空気にO・Sオーバーソウルさせると同時に、俺を脅さず、テオドラと、テオドラを担いでいる奴を守る様に構えていた奴に向かって、スイの足を…………、

ヒュン！「ウオツ？！」「危なっ？」「チっ！」「ふゴツ？！」…  
パシィッ！「うわぁ？」

風切り音が鳴る位の速度で伸ばして、捕まえると、

ズオオオオ「なんだ？！」「ヒッ！」「な！まさか！？」「オオオオ……。

スイの「全ての水と水素を操る」能力で、捕まえた奴の体内にある水分を全て吸収して「木乃伊」を一体作った。

生きたまま水分が取られていく様はかなりグロい。

肌が潤いをなくし、目がしぼんでいき、髪の毛がなくなり、声かどうかも分からない音を発しながら、例えるなら、人間の老化の過程を一気に見るような感覚だ。

最終的に骨と皮だけになり、地面に当たった瞬間、人間だった“モノ”は砕け散った。

テオドラには、まだ刺激が強過ぎたようで、気絶していた。

「こいつっ！『水の巨人を従える王』だ！！」

と、犯罪者の一人が気付いた様だ。

もう手遅れだな…。

「クソッ！魔法の射手・光の56矢！！」

一人が牽制で魔法の射手を撃ってくる。

もう一人は後ろに下がり何やら呪文詠唱をしている。

恐らく、雷系の呪文だろう。

しかし、

「水に光は駄目だろう。」

そう言うつと、俺の周りを囲む様にスイの足を展開する。

気分は籠の中の鳥だな。

そして、魔法の射手を全て乱反射させて無効化する。

ほんと、スイってチートだな…。（お前も充分チートだ！by作者）

「なっ?!」

魔法の射手を撃った奴は驚きと恐怖の入り混じった顔をこちらに向けてくる。

良い年したおっさんのこういう顔はかなり面白いと俺は思う（笑）。

「それでも喰らえ！白き雷！！」

つと、そうこうしてる間に詠唱は完了したみたいだが、あんだけ時間食って『白き雷』って……。しかも仲間が射線上にいるのに撃って来やがった。

こいつら阿呆だな。

「ひやはははは！知ってるか？水は電気をよく通すんだぜえ！？これで、てめえもお終いだあ！」

……無知つてのは恐ろしいねえ。

スイは自分の体と後ろ足4本を超純水に、前足4本の内側と先端を超純水、外側を不純物が入りまくった水に変え、周りに展開していた足を外側に広げるように、地面に突き刺した。俺は保険として『巫門遁甲』の準備をしておく。

ズバアアーン！！「ぎゃあああ！！！」

「なっ！なんで……？」

……どうやら保険は必要なかったようだ。

スイの足に『白き雷』が当たった。

しかし、

まるで、広げた足が避雷針のように『白き雷』を受け流し、外側へと放電した。

俺の近くにいた野郎は放電の射線上にいた為に巻き込まれ黒焦げになった。

「……知ってるか？水は水でも、純水は殆ど電気を通さないんだぜ？」

そう、俺はスイの足を純水の上の水、超純水と不純物が入りまくった水に分ける事で『白き雷』を受け流したのだ。

神クラスの水の精霊王の作った水が、人間の作る水よりもランクが上なのは当たり前。

そんな水だからこそ、魔法で作られた雷も受け流せたのだ。

さて遊んだし、そろそろ殺すか。

スイの足をウォーターカッターに変え、

「……は？」

渾身の『白き雷』を難なくあしらわれて某然としていた男の首を落とした。

「タ、タスケテクレエ！」

と、テオドラを担いでいた男は、なんと！気絶しているテオドラを放り捨て（この時点で、ご・う・も・ん・か・く・て・い・だああ！！）逃走を図る。

放り捨てられたテオドラを優しく受け止めると、近くの木の下に寝かせ、猿轡をとってあげる。痕とか残らないよな……。

そんな事を考えつつ、俺はミジンコの追討を開始する。

ニガスカア！！！！

〈30分後〉

あの後、ミジンコをただの細胞の塊にしてからテオドラを寝かした所へと戻る。

「お、おおお主！ななな何者なのじゃ！」

涙目でそういつてくるテオドラ。

どうやら眠り姫は、ゴミ掃除に行ってる間に起きていたらしい。

「俺は麻倉葉真。ん〜？……『水の救い手』って言えばわかるかな？」

なるべく恐怖を抱かせないように喋りかける。

「なっ？！お主のような子供がか？？！！」

「君の方が子供だろう？」

苦笑いを浮かべながら反論する。

今の会話で分かる通り、俺の身体と容姿は現在、原作当時のハオの色白黒髪verだ。

つまりは、13歳の男の子にしか見えないのだ。

「むっ、妾はもう大人じゃ！今年でなんと！10歳じゃ！どうじゃ、参ったか！？」

自信に満ち溢れた満面の笑顔。

……可愛い過ぎだろオオ！

「どうしたのじゃ？鼻を抑えたりして？」

「！っいやなんでも無いよ！

それよりも君はどうするんだい？家に帰らないと、ご両親が心配するんじゃない？」

何とかして話題を変えねばあ！！

「はっ！そ、そうじゃ！！急いで帰らねば！！お主！」「葉真。」へ  
「？」

「お主とかじゃなくて、葉真って名前で呼んで良いよ。」  
そう言って微笑む。

やっぱ、親しくなりたいしね。

「むっ／＼／＼。……分かったのじゃ。」

…な、なら、妾のことも、その、て、テオと呼ぶのじゃ。

……よ、葉真／＼／＼。」「

上目遣いでこちらを見てくる頬の赤いテオドラ。

………立った…フラグが立った！

俺にはニコポ何てない筈……。

はっ！いけないいけない……。

「じゃ、じゃあ！家まで送るから、道を教えてくれない？

——テオ。」

原作知識はあるものの、地理的な情報は全く知らない。

この世界の地図を見る機会があまりにも無さ過ぎた。

だって、賞金首だぜ？気にしてらん無かったよ……。

辺境の村に行く時だって、人に聞きながらだったし……。

でも、テオドラの家、帝国の城なら地図だってある筈だから、この機会にちゃっかり憶えてしまおう。

「！っ／／／／／分かったのじゃ！なら早くその巨人の上に乗せるのじゃ！」

「クスっ、はいはい。」

かくして、俺はテオと出会い、帝国へと飛んで行くのだった……。

え？どうやって飛ぶか？

……スイを飛行形態にして、コックピットに乗ってだけど。

……何か？

戦闘／恐怖／旗立（後書き）

フラグ、立ったね…。

「…そうだな。」

ビンビン、だね…。

「…そうだな。」

食べ頃？

「そうだねっつて！

何言わせようとしてるんだ！！」

チッ！

「舌打ち?!」

それでは皆様！

「「また次回！」」

御意見、御感想お待ちしております。

## 謁見／任命／邂逅1（前書き）

今回は3話で1つのお話という事にしたいと思います。

「長いな、グレートブリッジのトコまでだっけ？」

うん、その間にテオの騎士任命やら、何やらをぶち込んでいきます。

「というわけで」

「『『ちょ！勝手につけんな！』…。」

第7 - 1 / 3話始まります…。」「

## 謁見／任命／邂逅 1

謁見／任命／邂逅 1

あの後、テオの案内の元、俺たちは帝国の首都、帝都ヘラスへ向かった。

帝都にある宮殿の中庭部分に降り立った俺たちは警戒されたものの、テオ本人の証言により皇女を助けた旅人として、現在、謁見の間でテオと一緒に皇帝が来るのを待っている。

因みに、テオは上座にある金ピカな、背もたれが無駄に高いロイヤル臭が漂う椅子に座り、

俺はマントを羽織ったまま、スイをヌイグルミのようにマントの中から腕だけを出して、腕の中で抱えて、床に胡座をかいて待っている。

スイは原作のシャーマンキングで出ていたS・O・Fの小さいver、みたいな姿をしている。

スイで試しにできるかな？と思い、やってみたら、大きさの調整が出来た。前回の戦闘の時は大体7〜8mぐらいの大きさで、今は20cmぐらいに成っている。

∴上座に居るテオの視線を絶賛、独占中。

「まさか、テオが帝国の第三皇女だとは知らなかったよ。」

テオの意識を引き戻すように話し掛けた。

そう。俺はテオの事を原作の知識で知ってはいても、テオとはあった事は無いのだ。

つまり、初対面で帝国の第三皇女だと知っていたら、怪しまれてしまう。

どうやら俺は魔法世界の人々に『旅をしながら人助けをする世捨て

人』と、認識されているようで、そんな人物が帝国の皇族について知る筈が無い。

最悪、皇帝か、テオ本人、もしくは皇族の誰かを暗殺しに雇われたと思われてもおかしくは無いのだ。  
それを避ける為の知らん振り。

ホロにげえ…。

「ぬっ…、すまんの、葉真。

言い出す気分にならなかったのじゃ…。」

俺の言葉に、落ち込み気味に答えるテオ。

「いやいや、平気だよ。

なんせテオは誘拐されたんだし、怖い思いもした。

そんな状態で出会った、誘拐犯を全滅させた初対面の人間の俺に、自分の身の上を話す気になんて、誰だってならないと思うよ。」

「そ、そうかの？」

「うん、そうだよ。

だから、そんな顔しないで。

笑ってる方が可愛いよ。」

……臭いとか言わないでくれるとありがたい。

「！っ／／／／／」

顔を赤くして、サッ、と下を向いてしまった。

手を膝におき、両足をもじもじさせる様は眼福モノだ。

しかも、小さい声で「可愛い…葉真に…。」「妾が…可愛い…。」  
「妾でも…葉真なら…。」

とか聞こえてくるが、何の事なのかは聞かないでおこう。

ギイイ……

「「！」「」」

… 皇帝の登場のようだ。

上座の横にある扉から、豪華な服の上からでも分かる位、体格の良い皇帝と呼ぶに相応しい空気とプレッシャーを兼ね備えた褐色の、頭にテオの角と形のよく似た角を生やした金髪の男、否、漢、皇帝その人が出てきた。

皇帝は先ず品定めをするような目で俺を見る、次に上座にいるテオを見ると、

「テオちゅわああああああん！！！！！」

「「「」」」

前言撤回。ただの親馬鹿だ。  
しかも、声が中田譲治って…。

「お、おおお父様?! くすぐったいのじゃ!!」

「テオちゃあああん! 怪我は無いかな?! 病気は?! お腹は減っていないかな?! それとも、寝不足かああ?!」

テオに飛びついて、抱き着くと、頬擦りしながら色々と質問しているが、テオは自分の父親の恥ずかしい一面を俺に見られたのと、父親が自分の心配をしてくれたのが嬉しいとが混ざり合っているのか、質問に応えられるような状態ではない。

まったく、仕方ない(……)。

「はあ…、とりあえず落ち着け…。

スイ…。」

コクン。…ポワン。……びゅっ!

パン! 「ぶっ!?!」

スイ(ヌイグルミサイズ)に水の塊(拳大)を作ってもらい、それを皇帝の顔にぶつけた。

あっ! テオにも水がかかった…。

〈1時間後〉

水で濡れた服を着替える為に、皇帝とテオは何処か、恐らく自室へ行ってしまった。

先に皇帝が着替えを終えて、戻ってきた。

しかし、その後、テオと入れ替わりで入ってきた羊の角を生やした執事の爺さんが、今日はテオも疲れているので、風呂に入れて着替えさせたら、そのまま寝かせる、との旨を伝えにきた。  
俺も親馬鹿も了承しておいた。

「いやあ、スマンスマン！

テオちゃんがあまりにも可愛くて可愛くって！  
これで不眠不休で5日は仕事できるな！！」

「なあ…。」

「ん？なんだい？」

「…芝居は辞めにしないか？」

「…フツ、バレていたか。」

親馬鹿から一転、その風貌に見合った皇帝へと変化した。

「当たり前だ。

皇帝ともあろう漢が、あんな醜態を旅人とはいえ、客人のいる前で

やる筈無いからな……。」

「イヤなに、こうしたら、君の方から気付いてくれると思ってね。」

「俺と二人だけで話したい……。」

「そういう事だ。」

「で？何を話したいんだ？」

「……。」

皇帝は座っていた椅子の上に胡座をかくと、

「一人の父親として言わせてくれ……。」

私の娘を救ってくれて、

ありがとう。」

と、頭を下げた。

## 謁見／任命／邂逅1（後書き）

最後までだったでしょうか？

「作者にしてはよかったと思うよ。」

皇帝の描写とCVは？

「俺は、渋い。大人。恰好良いと思ったけど？」

スイのミニマム化は？

「抱き心地抜群。」

それでは！

「「次い回を！待あて！！」」

御意見、御感想お待ちしております。

## 謁見／任命／邂逅2（前書き）

今回は任命式、D A Y O！

「阿呆の作者の割に、結構真面目な話になってんな。」

おまけもあります。

「なんだと！」

おまけでは、皇帝が、あの旦那に…。

「何してくれやがる！」

それでは

「「第7 - 2 / 3話の始まり、D A 「」

p s . テオの出番を増やしたいイイイイ！！

お気に入り登録数200突破！！！！

これからも皆さんの期待に添える様な作品作りをして行こうと思います！

## 謁見／任命／邂逅 2

謁見／任命／邂逅 2

チュンチュン……ボタン！！

「葉真！話しがあるのじゃ！」

勢い良く扉が開く。

テオが若干、顔を赤くしながらも、彼女本来の快活で、元気な調子で入って来た。  
今日も可愛いな。

……来た理由は全く分かんが。

「どうしたの？テオ？」

言いながらベッドから起き上がる。

「にゃ?!」

ベッドから起き上がった俺を見て、更に顔を赤くする。

おめでとう！

テオがテオにやんに進化した？  
グレートアップ

猫耳ないかな？

……。

ゴホンッ！状況整理！

俺、ベッドから上半身裸、で出て来る。

テオにゃん、俺の裸（上半身）を見て、赤面。

以上！

えーと、神から貰ったチートの中で、『身体を鍛えて、細マッチョに成る！』的な物があつたよね？

しかも、原罪が無いから、『とある魔術の禁書目録』に出てくる『聖人』並みの身体能力が付加されており、つまるところ、俺の肉体は、かなり筋肉質な物になっているわけだ…。

そんな肉体を目にすれば初心な女の子は当然……

[illegible]

このように、素敵な角付き褐色猫娘に（殴（ならねえよ！！！！！！b  
y作者）

… 作者は後書きで殺すとして、今はテオノ、ゲフン！ゲフン！

テオ にゃん！をどうにかしなければ。

「おゝい…。テオ…。戻ってこゝい…。」  
咄嗟にマントを着てテオの耳元で囁く。

「…はっ！…妾は一体何をしてたのじゃ？」

「おっ？正氣に戻ったか？テオ？」

「おお！葉真！妾は其方にはな…し…が…。」  
「どうした？」

「か。」

「か？」

「顔が近いのじゃ…！」ブォン…！

「へブらい？！」

思いつ切り、顔を殴られ、

「あつ。」

俺は氣を失った。

~~~~~

あの後、氣が付いた俺は、テオと共に昨日の皇帝と謁見した部屋へと向かった。

テオの話は聞けていないが、任命式の後でも、聞いてみよう。

ギャグ補正は馬鹿に出来ないとも思った…。

~~~~~

「旅人、ヨウマ・アサクラ…。

貴殿をヘラス帝国、第三皇女、テオドラの、第一級近衛騎士として  
任命する…。

異論は、あるか？」

中田譲治の声でこんな台詞を言われたらテンションがとんでもない  
事になるが、今は抑えなければ。

「ありません。

…謹んで、お受け致します。」

さて、何故こんな真面目にシリアス気味な状況かと言うと、謁見の  
時、礼を言われた後、皇帝が自ら俺に、涙ながらに頼んで来たのだ。

以下、回想。

~~~~~

「私はあの娘に、テオに、父親らしい事を何一つしてやれていない…。

宮殿の中では、私を皇帝の座から退かせようと蠢く臣下達に、必要以上に目を付けられない様に、テオには冷たく皇帝として接さねばならない…。

先程のアレも、演技ではなく、本当に、親として接した久しぶりの時間なのだ…。

それでも、あの娘を狙う輩は、後を絶たん…。

今日の誘拐も、恐らく、一人で淋しい思いをしていて、出掛けたところを、誘拐されたのだろう…。

そんな思いをしているのにつ。

あの娘はっ、テオはっ。

こんな、愚かでっ、冷徹な男をつ、自分の『父』とっ！

『親』だと言ってくれっ！

それなのに！私はっ、何もしてやれない！

己の体で守る事も！父として接する事も！

何一つ！……！

だから、頼むっ！こんな愚かな…、自らの娘に、愛さえも伝えられない父の！男の！！

『娘を守ってくれ』

という願いを！！！！

叶えてくれ！！！！！！

それに対する俺の応え。

「…貴方が、『皇帝』として頼んでいたら、俺は断ってた。

だが、貴方はテオの『父』として、一人の『漢』として、俺に頼んだ…。

俺から言える事はただ一つ…。

テオは、貴方の『娘』は、

必ず『護』る！！！！！！」

~~~~~

こっして、

俺は晴れて、

テオの『騎士』に成った。

~~~~~おまけ~~~~~

謁見の後。

「なあ…、一つ聞きたいのだが。良いかね？」

「なんだ？」

「何故、君はテオの事を、呼び捨てと愛称で、ヨンデイルンダ？」

「（ゾクッ）いや、あの、テオが「テオ？」テオドラ「アア？」こ、皇女殿下がそうしると…。」

「そうか、そうか。ソウカ、ソウカ。」

「あの…。」

ジャキ

「ウゴクナ…。」

目の前に突きつけられるは、何処ぞの吸血鬼の旦那が愛用している、
白黒、二色の拳銃二丁。

「ちょ！それ何処から……！」

「闘争ノ始マリダ！！」

「アーカード「言ワセネエヨ！！！！」危なっ！！」
人間には撃てない筈のそれを、簡単に撃ってくる皇帝……
亜人だからか？

(俺がイジツたんだよ。by作者) ドヤア

「作者あああああ！！！！！」

覚えてやがれええええええええええ！！！！」

謁見／任命／邂逅2（後書き）

「作者ああ！！どこにイヤガル！！」

「ん？手紙？」

「何々？明日テストだから寝る？」

ふざけんなああ！！！！」

次回、遂に、蒼き転生者が、紅き翼と邂逅する！

前に、砂糖吐くことになるかも…。

御意見、御感想お待ちしております。

番外編

皇女／初恋／御話（前書き）

眼を疑いました

総合PV57、804アクセス、ユニーク10、327人。

見方が分からず、やっと見たら、何時の間にかこんなになっていたとは……。

「うちの駄作者がこんな失態をして、本当に申し訳ありません。」

ですので、お詫びの意味を込めて、今回は番外編『皇女／初恋／御話』とさせて頂きます。

「本編の方も執筆中ですので、暫し、お待ち下さい。」

それでは！

「「番外編の始まり！」」

番外編

皇女／初恋／御話

皇女／初恋／御話

葉真…。

最初に出会った時は、とても怖かったのじゃ…。

妾はあの日、いつも通りの抜け道を使って城下町に出掛けて行ったのじゃ。

宮殿の中では、誰一人として妾と遊んでくれぬ…。
殆どの人間が『帝国の第三皇女』としか見てくれぬのじゃ。

侍女も、衛兵も、執事も、

…お父様も。

だから、宮殿から抜け出して町に遊びに行くのはとても楽しかったのじゃ。

皇女とバレぬよう、認識障害がかかったフードを被る。

そうすると、町民は妾を妾として、見てくれる……。

それが嬉しくて、何度も抜け出したのじゃ。

でも、あの日は違ったのじゃ。

認識障害がかかったフードを被り、裏路地を歩いていたのじゃ。すると、いきなり四人組の男達が現れ、こう言ったのじゃ。

「皇女殿下、お迎えに上がりましたア……。」

妾は逃げ出そうとしたが、

「逃げらんねエよ！バアカがア！！魔法の射手ア・戒めの矢エ！！」

「きゃっ！」

一人の男が撃ってきた『魔法の射手』に当たり、身動きが出来なくなつたのじゃ。

「面倒掛けさせやがってエ……。」

「始めろ……。」

「貴様ら……ふぐっ！……ふがー！！」

「黙ってろ！」

「転移するぞ……！」

ヒュン！！……ドン！

「転移かんry「何してるんだ？」?!」

恐らく、超長距離転移魔法札を使い、どこかも分からない森の中

に誘拐犯と共に転移した妾は、そこで葉真と出会ったのじゃ。

妾は最初、葉真を見た時、思わず見惚れてしまったのじゃ。

乙女のように長い、艶のある黒髪に、羨ましいくらい白い肌、正に、物語に出てくる王子様みたいだったのじゃ。

「おい！てめえ！動くんじゃねえぞ！」

「見られたからにやあ、消させてもらっぜ！」

妾はこの時、葉真が強いなど知りもなかったのじゃ。

このままでは妾のせいで、無関係な人間を巻き込んでしまうと思ったのじゃ。

だから、

「ふごっ！ふがごごがごごがごご！（おいっ！妾の事は良いから早く逃げるのじゃー！）」

猿轡をされているのも忘れて、叫んだのじゃ。

しかし、

「O・S！in・AIR！」

と、葉真が言った瞬間。

水の巨人が現れたのじゃ。

その巨人はタコのような自らの足を、妾を担いでる男の前にいた男に飛ばしてきたのじゃ。

そして、その男を捕まえたと思った瞬間……

……あまり思い出たくない光景だったと言っておこう…

妾はその光景を見て、気を失ってしまったのじゃ。

暫く経って、轟音が響いたと同時に妾は起きたのじゃ。

妾はどうなったのかと思い、周りを見回して、怖くなったのじゃ。

最初にミイラにされた男“だった”であろう物体が散らばっており、黒焦げになった“何か”が、首の無い死体が転がっておったのじゃ。

妾は逃げようと思ったが、腰が抜けていたのか、立てなくて、更に怖くなったのじゃ。

すると、マントで体を隠した葉真が現れたのじゃ。

「お、おおお主！ ななな何者なのじゃ！」

と、しどろもどろに成りながら、妾は葉真に質問したのじゃ。

「俺は麻倉葉真。ん？ ……『水の救い手』って言えばわかるかな？」

これには驚いたのじゃ。妾と差ほど、年が変わらない少年があの伝説の『水の救い手』の正体とは、この時の妾は思ってもいなかった

のじゃ。思わず、

「なっ?!お主のような子供がか?!?!」

と、つい口に出してしもうたのじゃ。

「君の方が子供だろう?」

この言葉でカツチーン、と頭にきたので、多少ムキに成りながら、

「むっ、妾はもう大人じゃ!今年でなんと!10歳じゃ!どうじゃ、参ったか!」

と、妾は言っただのじゃが、その後、いきなり葉真が鼻を手で抑えたので、妾は、

「どうしたのじゃ?鼻を抑えたりして?」

と、聞いたのじゃ。

「!っいやなんでも無いよ!

それよりも君はどうするんだい?家に帰らないと、ご両親が心配するんじゃない?」

更に追及しようと思っていたが、この言葉で血の気が引いたのじゃ。

「はっ!そ、そうじゃ!!急いで帰らねば!!お主!」葉真。「へ?」

「お主とかじゃなくて、葉真って名前で呼んで良いよ。」
そう言つて、微笑んできた葉真。

この時既に妾は葉真に、惚れていたのかもしれないのじゃ。
それくらい反則気味の微笑みだったのじゃ。

「むっ／＼／＼。……分かったのじゃ。

…な、なら、妾のことも、その、て、テオと呼ぶのじゃ。

……よ、葉真／＼／＼。」

ぶっきらぼうにそう言っていたが、内心は「はわわわわわ／＼／＼／＼」「あんな顔反則なのじゃ。／＼／＼／＼／＼」「こ、今度は、満面の笑顔が見たいのう。／＼／＼／＼／＼」

など、混乱してたし、心臓もドキドキしてて、顔もなんだか熱かったのじゃ／＼／＼／＼。

「じゃ、じゃあ！家まで送るから、道を教えてくれない？」

「テオ。」

名前を呼ばれた。それだけ。

それだけの事なのにこんなにも幸せだと感じれるのは不思議だったのじゃ。

胸のドキドキが更に苦しくなって、身体が火照ったように熱くなり、妾の中を嬲るように、掻き立てるように、優しく、激しく、湧き上がってくる“モノ”があつたのじゃ。妾は簡単に納得できたのじゃ。

「ああ。」

「これは。」

初恋なんじゃ。

と。

「！っ／／／／／分かったのじゃ！なら早くその巨人の上に乗せるのじゃ！」

「クスっ、はいはい。」

妾は気取られないように気をつけながら、『初恋』を感じながら、葉真とワザとくつつくようにしながら、巨人の上に乗る、帝都を指したのじゃ。

妾を妾と、一人の『テオ』として見てくれる、愛しい妾の、初恋の相手。

葉真。

この後、ワザと道を間違えたのは言うまでもない、じゃろ？

番外編

皇女／初恋／御話（後書き）

恋愛モノは苦手なので、自信がなかとです。

「じゃあ書くな。」

ひどい！

「お前のテスト勉強の方が酷い。
無計画の末の、無勉強だろうが。」

反論出来ない！

「というわけで！」

「次回、乞うご期待！！」

本編も執筆中です！

御意見、御感想お待ちしております。

謁見／任命／邂逅3（前書き）

これが俺の！連続だああああ！！

「普通に連続投稿って言えよ。」

つか、やっと『謁見／任命／邂逅』編が終わったな。」

花園が見える。

「あ、そうだ。作者、殺すから。」

なんで？！

「前々回に何をしたか忘れてはいまい？」

あ、イヤ、やめて！ヒッ！

アア——ッ！！

謁見／任命／邂逅 3

謁見／任命／邂逅 3

宮殿内のテオの自室。

そこでは今…。

「駄目じゃ！絶対に駄目じゃー！」

俺のマントの裾を掴んで、涙目で訴えてくるテオ…。

おい、今、ハアハア言った奴。

職質するから、表出る。

えゝ皆様、お久しぶり。本当にお久しぶり。

主人公の麻倉葉真です。

現在、「ちよっとグレートブリッジ、行ってくる。」と言ったら、

テオに必死に引き止められている俺。

さて、ここで状況整へ理。

皆さん、原作で『グレートブリッジ奪還作戦』ってありましたよね？
今回ソレに、俺も兵士として参戦されたし、と皇帝直々に命令されました。

一応、テオにも知らせようと、話した途端に、マントの裾を掴み、
涙目＋上目遣いで引く「大体！何故妾の騎士である葉真が戦場に行
かねばなんのじゃ？！」

…すまん。テオを先に宥める。

「テオ、聞いてくれ…。」

諭すように話しかける。

「嫌じゃ！聞きとうない！」

マントの裾を掴んだ手に力が入るのが分かる。

「テオ、頼む…。」

それでも、何とか話をしようとする。

「聞きとうない…！」

葉真は妾と一緒にいれば良いのじゃ…！

一緒に遊んで、悪戯して、叱られて、それでも、一緒に笑ってくれ
れば良いのじゃ…！

だから、だから…！」

俺に抱き着いてきて、縋るように、離れないように、頭を俺の胸に押し付け、涙を流しながら、懸命に俺を引き止めようとするテオ…。

最低だな、俺は…。

女の子を泣かせるなんて…。

でも…。

「…テオ。俺は別に死に行くんじゃない。戦いに行くんだ。

絶対に生きて帰ってくる。

俺はお前の騎士なんだろう？ だったら尚更だ。

こんなに可愛いお姫様を、一人ぼっちになんてさせない。

約束だ。

必ず、帰ってくるから。」

「っ！ 分かったのじゃ…。必ず、必ず帰ってくるのじゃ。それ以外は絶対！ 許さん！」

言葉は強気なものの、声は震えている。

そして、グレートブリッジ。

若干、強引にテオを納得？させた俺は、スイの飛行形態でグレートブリッジへと向かい、帝国側の拠点へと足を運んだ。
拠点へ着いた俺を、兵士達は歓迎してくれたが、指揮官とかの踏ん返り返ってる奴は明らかに俺を毛嫌いしていた。
ムカついたから、全員もれなく、スイの能力で下痢にしてやった。
方法は…飲み水に少し、細工しただけだ。

現在、帝国の拠点で待機している。

〈20分後〉

「前線に紅き翼アラ・ルブラが現れました！！」

来たな！

「ヨウマさん！」

「分かってる！！」

あれ（・・・）を、試してみるか…！

〈10分後〉

「お前等が紅き翼だな？」

「おうよ！でもって俺がリーダーの、千の呪文の男！！」
サウザンド・マスター

ナギ・スプリングフィールドだ！！！！！」

かくして、紅き翼の主翼と、蒼き転生者は交錯した…。

謁見／任命／邂逅 3（後書き）

ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい
ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい…。

「作者が駄目なので主役の俺が取り仕切らせて頂きます。」

「今回で『謁見／任命／邂逅』編は終了ですが、グレートブリッジ
の戦いは始まったばかり。」

「というわけで、次回！『闘争／困惑／新事実（仮）』」

「乞うご期待！」

「御意見、御感想お待ちしております。」

闘争／急展開／残謎（前書き）

今回ちょっと、ミステリー風味です。

「解明されんのはいつ頃なんだ？」

大分、先です。

「具体的に。」

麻帆良祭としか言えません。

「…それは答えと言っくんじゃないのか？」

それでは！

「「どうぞ？」」

修正加えました。

闘争／急展開／残謎

闘争／急展開／残謎

俺はスイの肩部分に仁王立ちしている状態で、紅き翼の面々と対峙している。

「そういうお前は誰だ？」

褐色の筋肉Man…。

ラカンが俺に、ニヤニヤしながら聞いてくる。

ん？眼鏡をかけた刀を持った剣士、詠春が何やら俺の顔を見て、驚愕と憎しみの籠った目を向けて来た。

おかしいな…。

初対面の筈なのに。

ま、今はとりあえず…。

「俺は帝国の騎士…。

——麻倉葉真だ。」

と、名乗る、と同時に攻撃に出る。

それに反応したのは、予想外の人物だった。

「っ！みんな！散れえ！！」

そう言ったのは、近衛詠春…。

おいおいおい。本格的にどう言うこった…？

この技は今、初めて（・・・）使ったぞ？！

詠春の言葉に紅き翼のメンバーは全員散開した。

散開したその瞬間、

ピツッキイイイン！！！！

「な?!」

「うおっ?!何だこりゃ?!」

「これは…」

「やはり…」

「此奴もしや…」

上から、ナギ、ラカン、アル、詠春、ゼクトだ。

何が起きたかと言うと、紅き翼のメンバーが居たところには、巨大な氷の柱ができている。

これは俺の新技、『金剛氷柱（仮）』。

スイの『全ての水と水素を操る』能力で、空気中の水分を使い、不純物を全く含まない氷柱の中に相手を閉じ込めるように出現させると言う技。

なのだが…。

「おい、その眼鏡をかけて、日本刀を持った、巫女服の女の子を見たら息を荒げそうな変態剣士。」

と、葉真は毒を吐いてみます。

「ふざけるなア！一族の恨み（……）！！今ここで晴らせてもらっぞ！！『麻倉の鬼童子』！！！！」

と、逆上する詠春…。

せめてツッコミぐらいしろよ。これだから真面目くんは…。

その時、俺は詠春の眼を見てしまったんだ…。

わゝ白眼の部分が真っ黒だゝ。

テラコワス（泣）。

というか、一族の恨み？麻倉の鬼童子？なんの事だかさっぱりだ。

…急展開過ぎて着いていけねえ。

一気に潰すか…。

俺は詠春の攻撃を巫門遁甲で受け流し、服の襟首を掴むと、詠春本人をチビ、…合法シヨタのゼクト君の方へ、『とある魔術の禁書目録』の聖人並みの力で投げ飛ばす。

服が良く保ったな。千切れるかと思ったのに。

…詠春の身体が嫌な音を発しながら飛んで行ったのは、気のせいだと思いたい。

「ぬおっ?!」

ゼクトはそのまま受け止めようとするが、いかんせん、体格差があ

り過ぎてお話にならない。

投げ飛ばされた勢いのまま二人とも吹っ飛ばされてしまう。

「師匠!」「詠春!」

ナギとアルビレオが叫び、ナギが助けようと、二人が吹っ飛ばされた方向に全速力で飛んで行くが、

ドンッ!

「がア!」

「っ?!ナギ!?!」

俺が作った、窓ガラスも真っ青の透明な氷の壁に激突した。氷の壁を消す。

そのまま気絶したナギは、虚空に放り出された。

「ラカン!私が足止めをします!その間にナギを!」
言いながら俺に重力球をぶつけて来る。

このままだったら(・・・)ちとマズいな…。

あれ(・・・)の出番、だな。

「スイ!」

俺はスイのO・Sを解く(・・・)。
もちろん、俺は空に投げ出される。

「なっ?!」

アルビレオは突然の俺の行動に動揺する。
この程度で動揺するなんて甘いな…。
本当…。

「ハッハア！貰ったぜ！！ラカン「ラカン！待て」インッパクトオ
！！！！！」

勝機と思ったラカンが「ラカンインパクト」を放ってくる。アルビ
レオはラカンに待ったをかけるがもう遅い。

迫る『ラカンインパクト』。

分かる人には俺がやろうとしている事が分かる筈。

「甲縛式O・S！」

カッ！！……チュドーーン！！！！

『ラカンインパクト』が当たった。

しかし、

「……ちつちえなあ。」

もうもうと煙が立ち込める中、その声は聞こえた。

「バカな！？」

「ああ……。バグが此処にも……。」

ラカンは驚愕、アルビレオは言葉に、一種の諦めが滲み出ている。

さあてと、始めますかあ。

俺の切り札！！

「甲縛式O・S…。」

「ああだいしょう
蒼大将…。」

でも、詠春はなんで俺の事を知ってたんだ？
旧世界の方なんて一度も行った事無いのに…。

紅き翼を叩き潰す為、蒼き転生者は己の切り札を切る。

その胸の内に、確かな謎を残して…。

闘争／急展開／残謎（後書き）

「何を企んでる？」

ふふふふふふふふ
ふふふふふふふふ

「キモッ！！」

まあ…。付き合ってくれよ…。主人公。

「早め早めの更新が条件だ。」

過労で死ぬる…。

「じゃヤダ。」

シクシク…。

「と言うわけで！」

「次回を、お楽しみに！」

決着／帰還／仮契約（前書き）

帰って参りましたアアア！！！！

「…何してやがった。」

今回のお話の下書きやら、下調べをしてたんだよう。

「本当だな。」

はいYES。

「…タイトルコール行くぞ。」

「…決着／帰還／仮契約。始まります！」

最後にアンケート取ります。

誤字修正しました！

決着／帰還／仮契約

決着／帰還／仮契約

甲縛式 O・S、蒼大将。

こいつは実を言うと結構前の段階から考えていた。ところが、スイが代償を要求してきたのだ。

ちなみに、俺はハオのように完全に支配している訳ではなく、スイの意思を尊重してあえて、自我を残している。

代償として、常に O・S（ヌイグルミ形態）させている事、食料（腹が減るのか？）を要求されている。

例としては、生きたネズミや、野鳥の卵を要求される事が多い。どうやって食べるのか確かめる為に卵とネズミを渡して、後を付けてみたのだが、……ガクブルだった。

まず仮面に丸い穴が空き、その穴に生きたままネズミを入れる。もちろんネズミは溺れているので、もがくのだが、次第にしぼんでいき、ぺつ、と最終的に吐き出された。スイが去った後確認したが、体液や筋肉、内臓だけなくなっており、文字通り骨と皮だけの状態だった。卵についても然り。」

チュドーン！！

「…あの、全部、口に出てましたよ？」

ヒュン！！パン！！

「えっ？嘘？」

どうやら、無意識の内に喋っていたらしい。

ボボボボボボッ！！

「…気分悪くなっただが。」

ヒュン！！ヒュン！！ヒュン！！ヒュン！！ヒュン！！

ラカンさえも気持ち悪くさせるとは…。

スイ！恐ろしい娘っ！！

「…ところで貴方のその姿は一体、何なんですか？」

ドドドドドドドドドッ！！

アルビレオが質問してくる。

現在、蒼大将で戦っている俺。その姿について説明しよう。

まず甲縛式の媒体として、マントと手袋を使用している。

マントはリゼルグの『マステマ・ドルキーム』の触手が、水で構成され、スイの足と同じ数の8本の形に変化した物になっている。また、手袋はスイの二の腕にある縞模様の入った黒い角錐が手甲の様に変化した物になっている。

それと、何故か胸部に、スイの顔とも呼べる、蛇を模した仮面がある。

ババババババババッ！！

「これは“シャーマン”の“最終奥義”。“甲縛式O・S”だ。」

スパアスパアスパア！！！！

「“シャーマン”？まさか、先程まで居たあの巨人は精霊の一種だと？」

ズオン…！バチン！バチン！バチン！

更に質問か…。というか、良く知ってるな。流石、歩く古本変態紳士。

「オイオイ。スイは唯の精霊じゃない。“全て”の“水”と“水素”を司るような“神クラス”の“精霊王”だ。」

ドヤ顔で攻撃しながら言ってやった。おおお。驚いてる驚いてる。あつ、皆さん。只今、戦闘しながらラカンとアルビレオに、懇切丁寧に説明している主人公、麻倉葉真です。さつきから五月蠅いのは、全部、攻撃の音です。

「…貴方は一体“何者”、いえ、“何”なんですか？」

とか言いながら、重力球が空を覆うくらいの数に平気な表情で出す、ロリコン古本変態紳士、アルビレオ「イマ君。

こいつもチートだな。やっぱ。

まあ、答えてやりますか。

厨二臭く…。

「俺は“人”から“神”に至りし者…。

———
大陰陽神（だいおんみょうじん嘘）、麻倉葉真だ。」

…クツ！！セええええええ！！

黒歴史！黒歴史委員会の人はまだかああアアア！！

「“神”、ですか。…傲慢ですね。」キュキュキュキュン！！

「全くだ。俺様でも、自分の事を“神”とほざくヤローに会ったのは、テメエが初めてだぜ。」

「知らなかったのか？ “神” っていうのは傲慢で、適当で、自由で、——残酷なんだ。」

ゴロゴロゴロゴロ…。

「ん？なんだ？」

「…！！まさか？！」

先程までここ、グレートブリッジは晴天だったが、スイの能力をフルに使えば天候だって思いのままだ。

そして、

「——神鳴——」

残酷な『白』が世界を鳴らした。

「なんとか終わったな…。」

アルビレオとラカンを倒した。が、遊び過ぎた。

本当なら帝国の勝利にしたかった。しかし、何時の間にか味方は全員撤退した後。

ブリッジは原作通り奪還された。

まっ、甲縛式O・Sの実験は出来たな。さて、帰るも「千の雷!!」
ビシヤアアアアアアアアン!!!!!!

「ハア…ハア…ハア…ハア…へっ!!ざまあみやが」
「おい…小僧…」
「っ!!」

ナギの背後に出て、首を怪力で締め上げる。

不意打ちしやがった…。

このクソガキ。

『超純水』の盾で防いだから良い物の、当たってたら動けなかったな。こりゃ。

「戦いは終わった。なのにお前は俺に攻撃した。そこら辺にいる負傷兵を巻き込んで、だ。」

そう…。此処はまかり間違っても『戦場』。負傷兵は直ぐ様、治療できる場所に担がれる訳では無い。銃弾…。今回の場合は、人を殺す様々な魔法が飛び交う中で、怪我人を担いで移動出来る可能性は

0に近い。最悪、負傷者が増える。何より、こいつが放った魔法、『千の雷』で両陣営の兵士が負傷しない筈が無い。

「っ！！！！！！！！！！」

何か言いたそうだが、首を締めているので口パクだ。

「…今度からは、周りの状況を良く考えて魔法を使え。
サウザンド・マスター
千の呪文の男。ナギ・スプリングフィールド。」

そう言っつて、気絶したナギをこちらに向かって来ていた詠春へと投げ飛ばす。

「そいつと、他の仲間を連れて40秒以内に逃げろ！！全て押し流す！！！！！！」

そう言っつと、詠春は俺を睨んで口惜しそうにしてたが、仲間の方が大事だと思っつてか、瞬動を使い消えた。

40秒後、俺はグレートブリッジごと、東京ドーム3杯分の水で、総てを押し流した後、テオの元へと向かった。

（ヘラス帝国：宮殿）

「たで〜ま「葉真！！」うわっ！？」

帝都の宮殿に帰った俺は、テオにダイビングハグをされた。何処でかと言っつと、謁見の間。

つまり、両手に二丁拳銃を持った皇帝様が居るのだ。

「」

「死ノ覚悟ハ出来ト「お父様なんか嫌いなのじゃ!!!」」

おいしいおいしい!!! テオ! それは全世界の可愛いお子さんを持つ父親にとつての、突き穿つ死翔の槍!!!
ゲイ・ボルグ

純粹な子供特有の残酷さが成せる所業! まさに、約束された勝利の
エクスカリバー 剣!!!

そして! その破壊力は、相手が子供を溺愛するお父さんならば威力を増す、天地乖離す開闢の星 (エヌマ・エリシュ)!!!!!!
それを、それを...

言っちゃらめエエエエエ!!!

って...

「...」

テオに連れて来られたのか、何時の間にかテオの自室に来ていた。

「葉真! 葉真! 葉真! ようまあ!」

抱き着きながら名前を連呼される事になるとは。
どこぞの暴食シスターを思い出したぜ。でも今は、

「テオ。ただいま。」

テオを抱き締める。

「グスッ...。おかえり、なのじゃ。」

俺の左肩に頭を乗せ、抱きしめ返し、囁いて来るテオ。

その頭を右手で撫でる。久々のテオ成分を補給しよう。

（30分後）

そろそろ腕がきつくなつて来た。立ったまま、抱き締めている人の頭を撫で続けるのが、こんなに大変だとは。

しかも辞めようとする、「あつ…。」やら、「あう…。」やら、「もつと…。」とか小声で囁いて来るから辞めらんねえ！！俺の理性ももうヤベえ！！

「葉真…。」

耳元に息がかかるように囁いて来るテオ。
頼む！俺の理性！！保つてくれえ！！

「な、なんだ？テオ？」

「わ、妾と、か、か、か仮契約、して、欲しいのじゃ…。」

仮契約だとおおおオオオ！！
キス

「いや、でも、それは…。」

「わ、妾じゃ、い、嫌か？」

泣きそうな震えた声で言うんじゃねえ！！
理性が限界突破寸前なんだよオオオ！！

「よし！仮契約しよう！さあやるう！すぐやるう！今やるう！」

突破したアアア！！理性^{ブルータス}ウウウウ！！

「わ、分かったのじゃ！なら、陣を張るのじゃ！」

パアアア…。

テオが取り出した（?!）魔法札が光り、仮契約の陣が光を帯びながら床に描かれる。

「じゃ、じゃあいくぞ！」

「う、うむ！ど、どんと来い！なのじゃ！！！」

字面にしたらとんでもねえな…。

というか、これじゃ緊張したカップルの初『P i』じゃね？

俺達は示し合わせるでもなく、目を瞑る。段々と2人の距離は近づいていき、

「んっ…。」「パアアア！」

一層、光が強くなり、2人は一つになった。

健全な意味でね。

その後、顔を離すとテオの顔は真っ赤だった。俺も同じだと思う。

「「。」「」

しばらく、見つめ合う。テオが目を瞑る。そしてまた、一つになるうとして、

マントを引つ張られた。

引つ張られた方を見ると、そこには！

スイ（ヌイグルミsize）がアーティファクト・カードを持って引つ張っていた。

……見・ら・れ・た！！

決着／帰還／仮契約（後書き）

今回、アンケートするのは、ズバリ！葉真のアーティファクトです！

本編でテオと仮契約しましたが、アーティファクトの詳細は決まっております。

ですので、以下の条件を元にアイデアを募集致します。

・アーティファクトに、そのアーティファクトと所縁のある精霊が憑いた物である事。

例

アーティファクト：『春雨』

精霊：『阿弥陀丸』

属性：『刀』

と言った具合です。

期間は一週間と致しますので、皆様のご応募をお待ちしております。

それでは、次回「能力／増加／密会」をお楽しみに！

番外編2 日常／皇女&神様&娘／R - 15? (前書き)

今回、弱R - 15だと思います。

後、親子丼的な表現があります。苦手な方はバックして下さい。

さらに、作者はヘタレで、情景を中途半端に終わらせています。これも嫌いな方はバックして下さい。

連続して投稿して行く予定です。

具体的にこれを含めた番外編が二本、ハロウィン特別編が一つの、本編一話と言う流れです。

本編では、アーティファクトを發表します。どうぞご期待下さい。

番外編 2 日常／皇女&神様&娘／R - 15？

番外編 2

日常／皇女&神様&娘／R - 15？

チュンチュン朝チュン…。

やあ！みんな！グレートブリッジ奪還作戦から帰って来て、テオと仮契約した麻倉葉真だよ！

能力の確認は今日やる予定なんだが、現在、俺はベッドの上にいる状況だ。周りを確認しよう。

「んっ…葉真…」

テオが俺の右腕に、まだ未発達な胸を押し付けながら擦り寄ってくる。その寝顔は、元々の端正な顔立ちと、愛くるしい表情がアクセントとなり、絵画のモチーフにしても可笑しくない。窓から差し込んでくる朝陽に反射して輝く金髪と、褐色のシミ一つ無い綺麗な肌と合間って、天から舞い降りた褐色の女神と言っても過言ではない。鼻腔をくすぐる甘ったるい、子供特有のミルクのような温かな匂いは、彼女の小ぶりで、可愛らしい唇を情熱的なディープキスで蹂躪したい衝動に駆られる。

「ふみゅ…葉真さん…」

いつの日か、喰ってしまった幼女を成人ぐらいまで成長させたよう

な、茶髪でセミロングの美女が、左腕を胸の間に挟んでいる。二の腕を包み込む大きく柔かい弾力の有る胸は、俺の動きに合わせるようにしながら、その形を変化させる。

寝顔はかなり色気があるが、むせ返るような物ではなく、むしろ、清純な女の子が魅せる健康的なものに思える。

例えるならば、汗だくになるまで運動して、サイドテールで束ねていた髪を解き、水道で水を飲んでいるボブカットの少女の横顔、といった具合だろうか。

「ううん…父上え…」

下敷きになって寝ている、ショートカットで黒い髪、15歳くらいの美少女は、俺の脇の下から手を出し、俺の胸の前で手を組み、俺を抱きかかえながら、小さくもなく大きくもないといったサイズの、形の良い自らの美乳に、俺の頭が当たるようにして眠っている。自分の頭の下に有るうつくしい、否、ふつくしい胸を、揉みたい衝動に駆られるが、両サイドの方々がそれを許さない。

揉みたいのに揉めない。

ホ口にげえ…。

俺も天才達も全裸だ。

さて、何故こんな、羨ま…ゲフン！ゲフン！…けしからん状況かは、回想を見てくれ。

く回想く

テオと仮契約し、その後、再度キスをしようとして、スイに全て見られていた麻倉葉真だ。

思わずテオと一緒にあって、子供に自分達のナニを見られた夫婦くらいにパニックってしまった。

えっ？ナニって…。ナニはナニだろう？

さて、落ち着いた所でアーティファクトを確認しようとした途端に、俺の後ろの空間にヒビが入った。テオは驚いている。

俺？

ヤヴァイ…と思ったね。だってあいつが来るんだよ？

「葉真さん！」

ヒビから出て来た長髪の美女が、その豊満な胸を使った、ぼでーぱれすという名のダイレクトアタックを仕掛けてきた。
俺の顔が彼女の胸に埋もれるように。

展開が読めた！

テオに殺されるー！！

「ようまアあアアあああああああー！！！！」

ほらね…。怒ったテオのハイジャンプからの、全体重が掛かったドロップキックのコンボだ。

…あつ。テオのパンツの色。ピンクだ。

ドグシャー！！

「葉真さん！？」「ハッ！よ、葉真？！」「ち、父上！！」

ん？父上？

そこで俺の意識は途切れた…。

「現在、葉真を蘇生中」

えゝその後、目が覚めた俺は、総ての事情を神から聞いたテオに、

「葉真…」

妾ともするのじゃ…。

これは命令なのじゃ…。

絶対なのじゃ…。

従わなければ言いふらすのじゃ…。」

黒いオーラを出しながら、据わっている目で命令（脅迫？）をされています。

転生とかの事は、

「妾が好きなのは今の葉真自身なのじゃ。一度死んだとか、転生したとか、そんなの全部どうでも良いのじゃ。」

葉真の総てを妾は受け止めるのじゃ。妾は葉真が好きじゃ。」

と、愛の告白をされ、綺麗に終わり、流されたかと思ったら、甘かった…。

「は、始めまして！ち、父上！貴方の娘の“麻倉あはくら慧月けいづき”です…！」

この娘が居たんですよ。

俺に似た目元と黒髪、白い肌とブルーの瞳が神にそっくりな、15歳くらいの、俺の事を『父上』と言うこの娘。ハイ。ソウデスネ。マゴウコトナキ、アノトキニデキタ、ワタスノ『娘』ダ。

手紙では小さい頃しか写真が送られて来なかったから、こんな美少女になっっているとは知らなかった。

そして、『貴方の娘』『父上』という単語にテオが、ダークなオーラを出しながら反応。

現在に至る。

「あんなテオ…。流石にそれは…。」

「この女が5歳の時に手を出した男が、今さら何を言ってるのじゃ？」

元幼女今美女の神を指差しながら言ってくるテオ。

本当に全部ゲロったのかよ！この駄神！？つか手を出すとか何処で覚えた？！

それに反論できねえ！駄菓子菓子！

「テオ…。俺はn「ごちゃごちゃ言ってるで、食べちゃえばいいじゃないですか。」神。お前は黙ってr「ち！父上！私も食べて下さい！！」おイイイイイイ！！彗月！親娘はマズいから！そんな涙目で上目遣いでもダメだから！！俺の人生が本当の意味で終わるから！！頼むから黙っててk「ほら！さつさとするのじゃ！葉真！！」テオオオおおお！！服を抜いでんじゃねえエエええええ！！俺を犯罪者にする気かああアアああああ！！」「母上に手を出した時点で、もうなってますよ父上？」

やめてエエえええええ！決してこないでエエえええええ！！実の娘に冷静に言われるのが一番キツイからああアアああアアあああああ！！

「じゃ。ヤリマスか？」

「も、ももも勿論なのじゃ！！」

「父上！失礼します！」

お前ら！人の話w「んむ！」ふおっ？！」

慧月が俺に飛び付き、キスをしてくる。深い方だ。

「ちゆる…チュパ…んむっ…はむ…ジユる…はあ…。」

慧月はディープキスに悪戦苦闘するも、その慣れていない感じが、逆に俺の精神を逆撫でし、昂ぶらせ、燃え上がらせる。

俺も神経が研ぎ澄まされたような感覚に陥り、キスがより刺激的に感じられる。

押し付けられてくる胸の感触と合間って興奮してきた。

勿論それに合わせて、まあ、その、俺のG・Sが全知全能になってくる訳で、

「?!」

「やっぱり…。」

「こここれがよ葉真の…お、おっきいのじゃ…。」

上から慧月、美女神、テオだ。

慧月は俺とキスしているから何か当たったとしか感じられなかったんだろう。

美女神は何やら『私の目に狂いはなかった』的な顔をしながら、ちやっかり見ている。

テオは初めて見た勲章に、驚きと羞恥と、若干の恐怖心を覚えたの

かな…。

「じゃあ、私がいけますね。」

そう言つて、神は俺の下半身に近づくと、

「はむっ！」

俺のナニを口に含んだ。

ヤバイ…。上と下を同時に両方やられたら、もう！

ぶびゅるるる！

頼む…。早漏とか言わないでくれ…。

「ん！…ごく…ごくん。」

なっ？！飲みやがった！？

「うふふふ。じゃあ次はテオちゃんですね。」

「！アホ！！テオにはまだ「葉真！！！！」！？」

俺の言葉を遮ってきたテオ。

「葉真！言つた筈じゃぞ！妾は葉真の総てを受け止めると！！！だから、さ、さささっさとするのじゃ！」

…はあ。震えてんじゃん。

俺は彗月に退いてもらい、テオの方に近づく。

「…テオ。」

「な、なんじゃ？ようm「ちゅ」」

キスをする。

テオは目を見開いて驚いたものの、段々と目を閉じていき、舌を絡ませてきた。

「「ジユる…チュパ…チュ…ジユる…ハア…ハア…チュパ…ちゅる…ふーふー…ジユる…ぢゅ…」」

俺とテオのデープは、一つの音楽のように重なり合い、舌が触れ合う度に、もっとしたいという欲望が胸の内から溢れてくる。

俺はテオを抱き締めながら押し倒して、テオに覆いかぶさるように執拗にキスを続ける。

（30分後）

「「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…。」」

流石にやり過ぎた。30分もキスするのは単純な息止めよりも辛い。興奮していくから酸素が足りなくなるし、それに合わせて呼吸も荒くなるから、悪循環が生まれる。テオの下を見ると水溜りのような後が出来ていた。

「それでは本番イきまゝす！！」

「ハア…ハア…葉真…」

…優しくハア…ハア…するのじゃ。」

「父上え…。もう我慢出来ません。」

…きて。」

その瞬間、俺の理性は吹き飛んだ。

「見せられないよ！！なプ…性k…ファイナルフュージョン！！
！！が展開中（精進します！！）」

「3時間後」

やっと…。やっと…。

やっと終わって「二周目いきます。」

…へ？

「母上どうします？時間的にも、今の父上の体力的にも、もう一周は難しいのでは？」

ナニライツテルンダ？

「ダイジョーブ！時間は一時的に止めます！それと、葉真さんの体力も、こんな事に成った時に、私が構想から合成まで手掛けた“特効薬”があります！！」

『トツコウヤク』？

ああ…。『突公約』ね？

「流石は母上！頼りになります！！」

「早速使うのじゃ！！」

アレエ？オレノ『意見』ハ？テオモ何デソンナニ乗り気？10歳デシヨ？

「じゃあ…「ガサゴソ…。ブォン…！」やりますよー！！」

何処からともなく、『ハイパー！マムシ ブレイク（試作品Death！）』と書かれた、目測で本体の長さ120cm、針の長さ30cmぐらいの大きさの注射器を出してくる神。

俺の本能が言ってる。

あれはヤヴァイト。

「は、はは話し合いをしようじゃないか？話し合えば！解決策だつて…」

「『『^{なのじゃ}問答無用（）です（）。』』」

俺がその時に見たのは、

三人の息の荒い女神達の、最高に良い笑顔だった。

く以上、回想く

こんな感じで濃い一晚を過ごした俺だった。

一通り搾り取られた後は、テオと慧月が俺の事を話し合って仲良くなったたり、美女神に膝枕されながら、慧月の成長過程を聞いたり、魔法薬で大人になったテオに胸を押し付けられたり、慧月が俺の事を、異性として好きだと暴露したりと色々あった。

最終的に何故か、皆で一緒に寝ようと言う事になり、俺は疲れてい

たので先にベッドに寝てしまい、その後に起きた事は分からないが、起きて気がついたら、こんな事になっていた。

え？リア充爆発しろ？

悪いね。

爆発したいくらい、

幸せだよ…。

番外編 2 日常／皇女&神様&娘／R - 15? (後書き)

「作者…。」

何かな？

「これはまずいと思うぞ。」

…やっぱり？

「親子井は流石に、なあ？」

…今日は寝汗に寝小便がついてきそうだ。

「お前、十代だろ？」

肉体は50のじじいなんだよ…。

「と言う訳で。」

「「次回の番外編をお楽しみに！」」

御意見、御感想お待ちしております。

番外編3 会議／正体／心傷（前書き）

今回、謎の一部が明かされます。

「と言うより、さらに謎が深まる展開だろう。これは。」

うん。この小説、大体、1年以上続けるつもりだからね。

「そんな計画で大丈夫か？」

大丈夫だ、問題ない。

「それでは！」

「「番外編3をどうぞ！」」

番外編3 会議／正体／心傷

番外編3

会議／正体／心傷

皆様、はじめまして。私の名はアルビレオ^{アラ・ルブラ}イマ。可愛い少女をこ
よなく愛し、萌えを探求する者…。紅き翼の一員です。

この様にナレーターを務めるのは初めてなので、大変緊張していま
す（嘘）。

私達は連合にある宿泊施設で休息をとっています。

そこでは現在、『“紅き翼”緊急会議』を行っている最中です。議
題はもちろん、先日のグレートブリッジ奪還作戦…。いえ、彼に（・
・）ついて、ですね。

「…圧倒的、だったな。」

包帯を、顔を含めた全身に巻いているラカンが言っているとおり、
圧倒的、それでいて、理不尽なまでの強さでしたね。

「ええ…。しかも、本気を出している様な気配が見受けられません
でした。“遊ばれていた”…と、解釈しても良いでしょう。

それに加え、よもや、天候まで操るとは…。

こちらの予想を遥かに上回る“敵”です。」

「なっ?! そんな事まで…!」

流石に、この中で最年長のゼクトも驚いてますね。亜音速で飛んできた詠春を受け止めて気絶してましたから、ラカン同様、包帯で顔以外、グルグル巻にされています。

…包帯を巻いた看護師（女性）の方の鼻息が荒かったのは、シユールでしたね。

「…彼についてですが、“シャーマン”…と、言っていました。」

「“シャーマン”じゃと?」

ゼクトが聞いてきます。

「なあ?“シャーマン”…ってのは、一体なんなんだ?」

魔法世界出身のラカンは、旧世界あじふについて知る機会は、あまり有りません。

それに魔法世界自体に『シャーマン』は存在しませんからね。

「“シャーマン”と言うのは、“シャーマニズム”…、精霊や死霊などと言った超自然的な存在と接触、交流、交信する。そういった現象を起こすとされる人物の事を、主に言います。」

「…とりあえず、奴がその“シャーマン”だつて事は分かった。だが、奴はそういった存在をどうしてるんだ? 最初のデカイ、水の奴は“神クラス”の“精霊王”とか言つてたが、俺とお前、そしてナギを一蹴した、“あれ”は何だつたんだ?」

…確かに。私達の目の前に現れたときに乗っていた、あの水の巨人は精霊の中の精霊、水の精霊王だと、彼の口から聞きましたが、最後の『あれ』、…『甲縛式O・S』と言いましたか？これだけは謎ですね。

何より、『O・S』と言うものが何なのかさえ、私達は知りませんからね。

その疑問に答えたのは、意外な人物でした。

「…最初のデカイあれは、“O・S”^{オーバー・ソウル}。霊が物体に憑依した際に溢れ出る、具現化した霊のことだ。

…ラカンとアル、ナギを一蹴したのは“巫力”の質を変化させ、堅く、小さく身に纏った形にする“究極のO・S”とも呼ばれる“甲縛式O・S”だ。」

割り当てられた部屋から出て来た、全身に包帯を巻き、眼鏡でなんとか判別できる状態の詠春が、かなり詳しく、具体的に答えました。私も含めて、その場に居る詠春以外のメンバーは全員思わず、間抜け顔になってしまいました。

そういえば、あの時に『一族の恨み』や、『麻倉の鬼童子』と言ってましたね。

「…詠春。まず言わせて下さい。…貴方は彼を知っているのですか？」

なんとか言葉を出しましたが、内心は驚いてます。ええ本当に…。

「俺の知っている“麻倉葉真”と、俺達を倒した“麻倉葉真”が同一人物なら、その質問の答えは“是”だ。」

是。…つまり、YES。と言う事です…。

「俺の知っている…」とは、どういう事じゃ？」

ゼクトが質問します。

「俺の知っている“麻倉葉真”は、1000年前…俺の故郷である日本の古都、京都に突如として現れ、己の外法を含めた、巫術の全てを記したとされる書物、“真・占事略決”を作成、編集し、俺の許嫁の祖先である近衛家に“写本”を献上した後、…未遂で済んだが、当時の京都に住んでいる人々と、京都の土地、そして、その場にあつた総ての霊の魂を生け贄に、“神”になる儀式を行い逃走。逃走後、追手として仕向けられた、俺の一族の開祖、“神鳴流史上最強”とも呼ばれた、“青山清乃麻呂”あおやまのきよのまろを殺害。その数々の悪業で“麻倉の鬼童子”と畏れられ、お伽噺や伝説の中で語られる。

人類史上、最も“最高”で“最低”、“最強”にして“最狂”の大陰陽師だ。」

…そんな伝説上の大物と戦つてたのですか、私達は。あとの2人も啞然としてます。

それよりも、気になる事が一つ。

「…詠春、貴方、許嫁が居たんですか？」

「ん？ああ。」

「「「「」」」」

（１時間後）

私達は新事実を聞いた後、詠春から“O・S”について話を聞き、今は軽食を食べながら、互いに話しています。

話を聞いて分かったのですが、彼の“O・S”と言うものが、とてもない代物だと再確認できました。

本来、一般的な“O・S”と言うものは、いわゆる靈感の無い人間には見えないものらしいのですが、麻倉葉真の“O・S”は密度が高すぎて、靈感の無い人間にも見えてしまうようですね。

しかも、“甲縛式O・S”というのは、彼ら“シャーマン”が使う力、“巫力”というものを堅く、小さく、その身に纏う種類の“O・S”のようです。

さらに、“巫力”を用いた物は“巫力”でなければ壊せないとは…。

それに驚きました…。許嫁というものが現代にも有るのですね。

「…人は見かけによらねえとは、良く言ったもんだな。」

「全くじゃ…。こんな頑固な小僧に許嫁とは…。世の中、分かんものじゃのう。」

「フフフフ…。詠春。披露宴には呼んで下さいね？
目一杯、茶化しますから。」

「…今は怒るべきだよな。うん。ソウシヨウ。」

上からラカン、ゼクト、私、詠春の順番です。

詠春が何やら刀に手を翳してますが知りません。オーラやら鬼の顔なんて一切、見てません。

「それより、ナギだが…。」

そうそう。ラカンが言った通り。その問題が残ってました…。

「まあだ凹んだのか？あのバカ弟子は…。」

さきの戦いで、彼、麻倉葉真に何やら言われたらしく、帰って来てからは、ゼクトの言うように、部屋に籠りがちになりました。食事を持って行っても、食べた形跡がありませんから、今日を含めて丸3日、絶食してますね。

痛め付けられた肉体よりも、精神的に傷付いているのが一目瞭然、ですね。

「…どうにかなりませんかね。我等のリーダーは。」

早く立ち直ると良いのですが…。

その後、私やラカン、ゼクト、詠春の『説得』でナギが立ち直るのに、2日かかりました。

泣きながら『千の雷』を乱発してきた時は、死ぬかと思いました…。

番外編3 会議／正体／心傷（後書き）

「なあ？なんだこれ？」

謎が深まっただろう？

「愛読して下さってる読者の皆様が、混乱したらどうするんだ!？」

…それでも旅は続いてく。僕らがいる限り!!!

「壊れた?!」

それでは皆様！

「ハロウィン編をお楽しみに!」

御意見、御感想お待ちしております。

ハロウィン編／日常？／少女たちの恋心（前書き）

シャーマンキングネタ入れます。

「どんだ？」

君の女装。

「」

それでは！

ハロウィン編スタート！

注意！若干のネタバレ成分があります。
それでも良いという方はご覧下さい。

時間軸は原作の2ヶ月前くらいです。

ハロウィン編／日常？／少女たちの恋心

ハロウィン編／日常？／少女たちの恋心

ピンポーン…。

…。

ピンポーン…。

無視だ。無視。

ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
…。

煩くなってきたから、しょうがない。

俺は寝起きのまま（上半身裸）で玄関に向かう。今日は日曜だから、一日中ゴロゴロしていようと考えていた矢先にこれだよ。

集金かなんかか？

ガチャ！

「なんだよ…。朝っぱらから…。」

「『トリックオアトリート！』」

ドアを開けたら、黒猫娘や、うさ耳メイド、白猫耳メガネっ娘、角付き褐色悪魔っ娘、生き返った元幽霊娘やらが、片手に籠を（幽霊娘は何も持っていない。）ぶら下げて満面の笑顔でこちらを見ていた。

「…待つてろ。」バタンツ！どたたたた…。

ドアを閉め、急いでカレンダーを確認する。

10月31日。

ついでに時計も。

10時ちょうど。

…ハロウィンD A a a…!!

だったら！俺も！！

「葉くんどうしたんかな？せつちゃん？」

そう言うのは、首に鈴をつけた毛色が黒の猫娘に扮した木乃香。服装は何処ぞの令嬢のようなシンプルなシャツとロングスカート。イメージするなら、ゼロ使のちい姉え様と呼ばれる女性の服装だ。猫耳と鈴以外。

「えっ？何、このちゃん？」

疑問を投げかけられたのは、頭にうさ耳カチューシャ、両手でモップを持った、白髪赤眼のメイドさん…。最近、レズ疑惑が浮上している神鳴流剣士、桜咲刹那。その人である。

「せつちゃん、顔赤ない？」

「ふえ？！そそそんな事あらへんよ！このちゃん！！」

「桜咲刹那、動揺し過ぎだ。」

神にーさまの半裸を見たくらいで赤面するとは…。
そんな事では、神にーさまの隣をゆずる訳には行かん…。」

エヴァは白い猫耳に、銀縁の伊達インテリ眼鏡をかけ、セーラー服と言う要素多くない？と言ってしまいたくなる格好だ。

「エヴァさん！ようくんは私達と結婚して、一生守ってくれるって5歳の時に約束してくれたんです！後から出てきた貴女に言われたくありません！！」

子供の時の約束って、意外と女の子の方が憶えてるよね。葉真は絶対に忘れないけど。

「エヘヘヘ。そやな。ウチらを助けてくれた後に言うてくれたもんな。」

刹那は少しの怒り、木乃香は照れで顔を赤くする。

「フツ、悪いが…。私は既に神にーさまの全てを見ている！！隅から隅まで！！完全にだ！！」

「なっ？！」

エヴァの発言に固まる刹那。

「あつそれなら、ウチらも一緒にお風呂入った時に見たえ。なっせっちゃん。」

木乃香も負けじと爆弾投下。

「こ、こここのちゃん？！」

「ほぼう風呂じゃと。ふふふふふふ…。風呂で裸を見たくらいで、何をそんなに慌てとるんじゃ。やはり小娘。妾が葉真とした事に比

べればぬるいのじゃ。」

そう言ったのは、先日、駆け落ちに成功した、原作時の大人ver.のテオドラ第三皇女その人なのだが、今現在は背中に蝙蝠の翼の生えた、胸の部分が大分、強調されているゴスロリ金髪褐色悪魔っ娘だ。

因みに角は、「こんな時にしか認識障害が外せないから、今の内に
出しておくのじゃ。」との事で本人の物である。

「にち にち にち にち にち にち にち にち にち にち にち にち にち?！」

ナニを想像したのかは分からないが、更に赤くなる刹那。

「せっちゃん。また顔赤うなつとるよ?」

「むっ
つり助平だな。」
「じゃな。」

「ち、違います!!」

頬を膨らませ怒る刹那。皆様、想像して欲しい。

うさ耳を着けたモツプを持った白髪赤眼のメイドさんが、頬を膨らませ、紅潮させて『ち、違います!!』と、怒る様を。

ナニコレ、天国？それとも理想郷？

「わあ。これが“はろういん”ですか！とっても楽しいですね！」

こう言うのは、地縛霊歴、約60年。つい最近まで死んでいた女の子(?) 相坂さよ、ちゅわ~~~~ん!!

服装は現在の麻帆良女子中の制服だ！その白い髪と絶妙なコントラストを演出していて、高まつてきた~~~~!!!!

「なんだ相坂さよ？お前、ハロウインを知らなかったのか？」

「えっ？あ、は、はい！今まで学校の中だけだったり、コンビニの辺りまでしか行った事なかったので、こういうお祭りの事とか気にする事がなかったんですね。えへへへへ。」

実際は違う。本当は一度ハロウインを見に行った事があったのだが、その時に見た仮装があまりにも怖かった為にトラウマに成り、ハロウインの日だけは、学校の屋上などに一時的に避難していたのだ。と言うより、幽霊(本物)が仮装(偽物)を怖がっているのだろうか？

「？さよちゃん？学校ん中だけとか、コンビニの辺りとかでどういう事？」

因みに木乃香は関係者では無い。よって、さよちゃんが元幽霊だとは知らない。現時点(2年生の秋頃)では。

「うええ?! ええと! あの〜その〜...。」

自分の犯した失態に動揺するさよ。

かなり可愛い。『うええ?!』って...。『うええ?!』って...。

「ああと木乃香！えゝ、さよはの、身体が弱くて、学校の近くのコンビニまで来れば御の字と言ったくらいだったのじゃ。」

例え、体調が良い日でも授業を受ける所ではなく、学校の中を見学する位しかできなかったのじゃ！そこで葉真が良い医者を紹介して完全に快復して、登校出来、現在に至ると言う訳じゃ！」

テオの即席にしては良い言い訳。納得するのか。

「そ、そやったんか！」

さよちゃん、これからたくさん遊ばな！ウチらで良かったら、いつでも付き合っえー！」

何とか誤魔化せたようだ…。

結構穴があるのにな。

木乃香はさよの手を握りながら言う。

「あ、は、はい！」

さよは目元に涙を少し浮かべながら肯定の意を示す。
新たな友情の始まりと言った具合、かな？

「…このちゃんと、さよさん。…ぽっ。」

やはり刹那は『腐』のようだ。

「ふはははは…。これで神にーさまを狙うライバルが消えるといいが…。」

「妾は心身共に葉真に捧げとるから関係無いのじゃ。」

と、年をかさ「アアン？」

…大人の女性組は余裕を漂わせている。

ガチャ！「あつ！葉くん出て…来た…」

「ようくん待つてま…した…よ…」

「神にーさま！早くお…菓子…」

「葉真！準備にどれだけかけと…るの…じゃ…」

「葉真さん！私、お友だち出来そ…うで…す…」

上から木乃香、刹那、エヴァ、テオ、さよの順番だ。

さて、何故、彼女達が硬直したか…。それは葉真の格好にある。

「我が名はプリンセス・ハオ！！この星を統べる者なり！！！！」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

その後、葉真を叱る時には、女装させて黒歴史を蘇らせる。と言う方法が取られる事になった。

未完！！

ハロウィン編／日常？／少女たちの恋心（後書き）

どやあ？

「」

あーあ。完全に放心してる。

「」

はあ。しゃーない。

それでは皆様！

次回の本編をお楽しみに！！

「はっ！俺は今まで何を？！」

御意見、御感想お待ちしております。

能力ノ持ち霊増加ノ密会（前書き）

本当ーに申し訳ありません！今回の本編の話を執筆中、マイパソが落ちて、一から書き上げていたら遅くなりました！

お待ちになっていた皆様の期待を裏切る行いをして誠に申し訳ない気持ちです。今後、このような自体が起きないよう尽力します。

さて！皆様！今回！遂に！葉真のアーティファクトを発表！します！

ダカダカダカダカダカダカダカダカダカダカダカダカダカダカ
ダカ…ダン…！！

沢山の御応募の中から選ばれたのはオレンジジュース0%様の案？
！アーティファクト：ウル・ナム法典。精霊：月神ナンナ。属性：
拷問器具。に決まりました！！

他のアンケートも魅力有る物ばかりで、甲乙付けがたい物ばかりでした！

御応募下さった皆様に最大限の感謝を。

愛読してくださっている読者の皆様の為、これから日々精進して

いきますので、本小説共々、応援よろしくお願いいたします。

長文になりましたので、本編の方をお楽しみください。

それでは！

本編のお！始まり！！

修正しました！

能力／持ち霊増加／密会

能力／持ち霊増加／密会

昨晚、やりまくった主人公、麻倉葉真です。

神と娘は起きたら、

「久々に逢えて嬉しかったですよ…。また逢う時まで、待ってて下さいね。あ・な・た。」

ちゅ！

「…父上。私の気持ちは気の迷いでもありません。私は父上を娘としても愛していますし、女としても愛しています。ですから、これは、その、えと、私の決意の証です！」

ちゅ！

と、熱烈なキスをして帰ってしまった。

神の奴は仕事を脱け出す為に、どうやら溜まっていた有給を使ったらしい。

神の仕事に有給なんてあったんだ…。

そうそう。今まで届いて来た手紙に書いてあったが、彗月も仕事の手伝いをしながら、頑張っているとの事。

淋しいような、嬉しいような、もっと話したかったな。

現在、俺はダイオリヤマ…、魔法球の中にある別荘にテオと一緒に来ている。

目的は、もちろん、テオとの仮契約で出て来た『アーティファクト』の能力確認だ。

カードに書かれていた称号やらなんやらは、次の一覧を見てくれ。

・ 姓名：ヨウマ・アサクラ

・ 称号：神に至った神

・ 徳性：中庸

・ 方位：中央

・ 色調：蒼

・ 星辰：流星

・ ローマ数字：∞

…俺の称号、恥ずかしい事この上ないんだが。

それでは気持ちを切り替えて！

「来れ！（アデアット！）」

カードが光り出す。そして、光が収まった時、俺の手の中にあったのは、

とんでもない物だった！！

「なんじゃ？随分と汚い粘土板じゃの？」

「いや、テオこれは…」

『随分な事を言ってくれる…。』

「「！？」」

いきなり聞こえて来た声に驚く俺とテオ。

…なんか余計なのがついて来た？！

『はじめましてだな“新人（新神）”。…。私は“月神ナンナ”。…。分かってると思うが、その粘土版は“ウル・ナンム法典”の“オリジナル”だ…。』

モノホンの神、来た——！！！！！！

声の方に顔を向けると、そこには、三日月を模した仮面を被った銀髪のアバさんみたいなのが宙に浮いていた。

詳しく説明すると、まず身長は、約90cmと言ったところだろうか。

肌は褐色、髪型はツインテールで、服装（装飾？）は、下はゆつたりとした青色のサルエルパンツで、上は肌着のような薄い服の上に、貴金属類のアクセサリーを飾っており、服を着るといよりも、アクセサリーを着ると言った方が正しい。

仮面は口元以外の顔全体を隠すような物で、三日月の部分は、顔の上半分を隠すようになっていて、月の両端が牛の角の様に上を向いているのも特徴だ。

足や腕にも、派手なアクセサリーを着けており、どこぞの国の大富豪の娘がオカルトにハマったら、こんな事になるんじゃないだろうか。因みに、胸は断崖絶壁だ。

そっういや、こいつ男だったり、女だったりするんだよね…。今はどっちだ？

つか！『ウル・ナム法典』で、世界最古の現存する法典じゃないか！！

そのの『オリジナル』？！

『とある』か！？『とある』の『原典』なのか！？

『そのの新人…。独り言は寝てから言え…。』

「葉真…。良い医者を紹介するから、ここから出たらすぐに行くのじゃ…。」

「…どこから出てた？」

「葉真が「モノホンの神、来た——！！」とか言い出したところなのじゃ。」

「……」

全部じゃねーか…。

しばらく、鬱に成りそうだ。

（10分後）

「さて！気を取り直して、アーティファクトの能力確認といきますか！！」

テオにディープ、胸さわり、尻さわりを総て、10分で同時にやって、ようやく復活した。ちょ！石を投げんな！！そこ！愛撫じゃねえよ！！バカ！その手に持った電話を今すぐ置け！！110は止せ！！

ごほんっ。さてどんな能力だ？

ナアニコレ？

名称：総ての存在が^{ミンナノオウチ}入る場所

能力：任意の存在（人間、動物、と言った生命体、精霊、神、霊などの超自然的存在を含む。）を出し入れできる。

入れる時には『蒐集：“存在の名前”』、出す時には『開放：“存在の名前”』と言わなければならない。

自分も入れる事が出来、所有者と所有者の認めた存在のみ出入り自由。

中の体感時間を操作可能。

最小で中の1000年を外の1日、最大で中の1日を外の1000年に操作出来る。

入れる事のできる存在の上限は、神クラス20体。精霊クラス369体。下級霊などは139億5869万1254体。人間などの生命体は5086億3256万9358体。

『去れ（アベアット）』しても中の時間は進むが、中に入る時や、存在を出し入れしたい時は、『来れ（アデアット）』しなければならぬ。

もう疲れたよ…。パトラツ。ユ…。もうチートは要らないんだ…。

思わずorzの体勢になってしまふ。

「おお…！スゴいのが出て来たのじゃ…！流石！妾の葉真なのじゃ…！」

テオよ、そんな満面の笑顔で俺を無理矢理、叩き起こし、抱きつきながら言うけど、これはかなり悪い事ができるぞ？

どっかの国の大統領を閉じ込めて、兆単位で金をせびるなんて事も出来る訳だし、あつ。

MM元老院の糞蛆虫どもにやってやろう。

そうすれば憂さ晴らしも出来て、金も稼げて、世界の害悪も消えるから、一石…十鳥くらいか？

え？もちろん。生かして帰す訳ないじゃん。

「確認が終わったからどうしよつかなく。」

『おい。新人。話がある。』

げっ…。ナンナから呼び出された。めんどくせ。

「え」と…。何かな？」

『アーティファクトの中に私を入れろ…。そろそろ飽きた…。』

ふう。そんな事が。

「分かった。行くぞ！『蒐集：“月神ナンナ”』！」

キーワードを言った途端、ナンナは光り出した。スピード遅いな…。

『あつ…。そうだ新人…。私はお前を一応認めてやる…。O・Sまでなら出来るから…。媒介は“ミンナノウチ”でも良いし、カードの状態でもいいぞ…。』

そう言い残して、ナンナは光の球に成り、アーティファクトの中に入って行った。

気づくと何時の間にか、紙が落ちていた。拾って読んでみる。

く新人へく

気になる私の性別だが、

私は両性具有だ…。いわゆる、ふたなりだ…。

あと、胸は崖っぷちからチヨモランマまで自由自在だ…。

ンナより…。

お前の先輩…。月神ナ

P・S 神の中では、完全にお前は、スゴいアレの持ち主みたい
になってるぞ…。

…神になってまで弄られキャラか、俺は…。

その後、立ち直るのに、4日間（魔法球内で）、テオに慰めて貰った。

性的かは…。想像に任せる。

（その後のある日）

パンツ！

「葉真！オスティアの王女に会う為に出かけるぞ！！」

おつ、遂にあの会談か。

案外遅めだな。

「葉真！何をしておるのじゃ！とっとと準備して、妾を連れて行くのじゃ！」

「分かった分かった。」

そう言いながらテオの頭を撫でる。

「ナデナデするのに、テオの髪は最高なんだよな…。艶も、感触も、匂いも良い。」

「な？！よ、よよ葉真！？撫でるな！！今は会談が先なのじゃ！！」

「怒ったテオも可愛いな…。」

「……」

「あれ？テオ？顔が真っ赤だよ？」

「きゅうう…。」

立ったまま気絶しちゃってら…。

「はぁ。仕方ない…。このまま連れて行くか。スイ？どこに居るの？スイ？」

俺はテオをお姫様抱っこして、スイを探し始めた。

「夜の迷宮」

久々に出て来たスイをO・Sさせて、ショートしたテオを連れて、夜の迷宮に来た。

テオは行く途中で気がついて、自分の状態、俺の腕の中でお姫様抱っこされているのに驚き、そそくさと俺から離れた。

…もう少しテオを楽しみたかったな。

現在、オスティアの姫君、アリカさんを待っている。

少し愉しみだ。だってあの曲者ぞろいの『紅き翼』を飼い慣らした程の人物だよ？面白くない筈がない。

「…遅れて申し訳ない。」

！ご本人登場だ。

「いや、気にしておらんぞ、オスティアの王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿。」

テオも真面目だ。まあ、この会談で戦争が終わるかもしれんし。結

局、失敗するけど。

「お心遣い感謝します。…して、そこに居る少年は？」

うんなんて自己紹介しよう？

「妾の騎士をしておる、麻倉葉真じゃ。」

「なっ！このような少年があの、『激流の羅刹』！」

そうそう！あの作戦の後、俺に厨二な二つ名が増えたんだった。それの一つがアリカが言った『激流の羅刹』。何でもかんでも流して破壊するのが、何か怖かったらしい。あと、甲縛式O・Sの『蒼大將』がイメージとして有るのかもしれない。

「テオ、勝手に紹介しないでよ。まあいいや、初めましてアリカ王女。テオの第一級近衛騎士をしている麻倉葉真だ。以後お見知りおきを。」

言いながら礼をする。最低限のマナーはやらなくちゃね。顔を上げ、アリカの瞳を観る。

80年の間に何か知らんが、人の本質を見抜けるようになっていた。交渉の時はかなり便利だ。

へえ…。揺るぎない決意と使命感、それと確かな自分を持ってる。合格点！

つい、顔がにやけてしまった。

「ほお…。葉真が初対面で認めたのは、お主が初めてじゃぞ、アリ

力。」

なんか、少し棘が見えるのは何故なんだろう？

「そ、そうですか…。それと、私の事は気軽にアリカと呼んでください、テオドラ殿。」

「うむ、分かったのじゃ！アリカ！それと妾の事もテオと気軽に呼んで良いのじゃ！敬語も要らないのじゃ。」

「…分かった。テオ。」

これでスムーズに会談は進むな。

あの後、この戦争について双方話し合いをし、最終的には、裏で戦争を操っている『完全なる世界』コスモエンテレケイアを叩くという事になったのだが、

「…む！」

来たな！

「どうしたのじゃ、葉真？」

「敵襲だ。」

ドカアアああアあん！！！！！！

どうやって叩き潰してやるのか？

能力／持ち霊増加／密会（後書き）

「作者。お前の責任とは言わないさ。だから、今回のような失態をもう二度とするな。」

分かったな…。」

YES！BOSS！！

「ふう。それにしても、アーティファクトの能力さ、チートが過ぎるぞコレ。」

いやあ、これくらいいしないとき、インパクトないでしょ？

「…否定できんな。」

という訳で！

「「次回をお楽しみになのじゃ！」」

ちょー！アリカさんにテオちゃん！横入りしない！！

「御意見、御感想お待ちしております！」

葉真にも取られたアああ！！！！

圧倒／対話／説教？（前書き）

今回は話の展開的には全く進みません。

「俺がナギを精神的に追い詰めるだけだからな…。」

ま。次回で一氣に進みますけどね。

「は？進むって…。どの位？」

ん？授賞式までだけど？

「…アホかあアああ！！！」

それと、オスティアは落としません。原作のあれは作者は、大つつつつつつつつつつつつ嫌い！！！！Death！！

「無駄に文字を稼ぐな！！大体！どうやって落とさないつもりだ？！」

あれ？分かってなかったの？巫力は魔力やら気やらを通さないっていうの。

「あっ！そう言えば…。というかそれでどうやって……！そういう事か！！！」

主役が色々うるさいのでこのまま行きます！！

「おい！！！」

それでは！本編の始まり！！！！

圧倒／対話／説教？

圧倒／対話／説教？

「ぎゃあああアああああああアアアアああああアアあああ
あ！！」

「助けてくれえ！！出してくれえ！！」

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

「俺の足がアああ！！指がアアああ！！」

「熱いイ！あちいよお！！」

[! ! ! ! ! ! ! ! ! !]

いきなり五月蠅くて悪いね。ゴミ虫どもを、ナンナの属性、『拷問器具』と、スイの創った特製の『王水』で処刑している。

酷いもんだよ？相手の顔に掛かったら見たもんじゃ無い。それに声になってない叫び声を発してる誰かさんもいる。

拷問器具で相手の動きを封じて、足が潰れたり、最悪、千切れるから辺りは段々と血に染まっていく。

うん。まさに地獄。

テオとアリカ王女には、原作でナギ達が壁をブチ破った部屋？に避難してもらっている。こんな光景見せられないからね。

因みに、今使ってるのは、甲縛式O・Sの『蒼大将』と、ナンナのO・S『ナンナズ・クラウン』を併用している。

『ナンナズ・クラウン』の形状は王冠だ。ただし、三日月型の金版

が王冠の頂点に飾られており、縦の大きさは17cm位。横に15cm位で、縦に少し長い。

能力も半端なくて、使用者が見た任意の相手のみを拷問器具にかけると、ナンナは言っていた。

媒介はカードにした。だって“ミンナノウチ”だと、世界最古の粘土版だから、耐久性に難点が有って、戦闘には向いてないんだよね。

そうそう！スイとナンナは“ミンナノウチ”の中で仲良くなったらしい。スイが話し掛けて（一方的に）、一緒に遊んだら（喧嘩したら）友達！になったんだと。

“ミンナノウチ”の中だと、どうやら自動的に力が抑制されて、人間でいう5歳位の状態になるらしい。

それに合わせて体格や能力も小さくなっていた。

具体的には素霊状態スイグルミに成り、みんな可愛くなる。

初めて入った時に見たナンナはヤバかった。一緒に入ったテオが頬擦りしながら抱きしめた位だ。

俺や俺が認めた存在は、俺の意思で5歳の状態になったり、通常時に戻ったりするのも分かった。

悪戯でテオを5歳にしたら、舌つたらずの口調、小さくなってダボダボになった服、涙目＋上目遣いのコンビネーションで、

「ううー！ようまあ！なにをしめるのじゃ！はにゃくもとにもどすのじゃあー！」

愛（鼻血）が噴き出た…。

思わず愛でてしまった…。

性的には愛でてないからな！！

って、喋りながら殲滅してたら何時の間にか終わってたね。

「ううーん！はあ…疲れた…。主に雑魚の相手をやらされて。」

伸びをして愚痴る俺に、

『なんだ新人…？愚痴など垂れて…。あの小童の騎士なんじゃ無いのか…？』

O・Sを解除したナンナ（90cmサイズ）に突っ込まれた。

因みに、俺の事は『新人』。テオの事は『小童』。スイは『水の』と呼んでいる。

「いやあ。テオだけなら良かったんだけど、アリカ王女もいるじゃん？会ってものの数十分の相手を護るってのも、なんか…ねえ？」

『はあ…。あの小娘は認めたんじゃないのか…？』

「まあ、認めただけど、命かけて護る程じゃないな。」

『水の…。私達の相棒は阿保なのか…。?』

ヌイグルミ状態のスイに疑問を投げかけるナンナ。

……………コクンっ。

無言で頷き、肯定の意を示すスイ。

「スイい…。酷くないか? 80年の付き合いだろ?」

ブンブンブンブンブンブンブン!!

ばちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃ!!

『……………。』

めちゃくちゃ否定された。俺とナンナは首の振り回し方に圧倒され、黙った。スイの体を構成する水も勢いに負けて辺り一面に飛び跳ねてくる。

俺はビシヨ濡れ。王水で所々溶けた床も、血と水でビシヨ濡れ。

…死体を溶かしたら、掃除しよう。

〈1時間後〉

スイの能力で全部、押し流した!

「ふう! なんとか片付いた!」

掃除をすると心もなんか、スッキリ! するよね!

ビュオ!!

ちよ！スイ！いきなり攻撃してくんな！！

「あとは、二人のところに「ドカーン」……あいつら（紅き翼）が来たか。」

ナギはどんな反応するかな？

[illegible]

そんな事をヌイグルミ状態のスイに攻撃されながら思う俺であつた。

移動中

「やつ！久し振りだなあ？紅き翼の諸君？」

部屋の奥にあった壁を素手で壊して入室し、片手を挙げて、気さくに笑いながら話しかける俺。

「麻倉葉真……！」

「何でここに居るんだ?!」

「下がって下さい、アリカ姫、テオドラ皇女。」

「お前…？」

魔法を使うのが怖いのか？」

「！！！」

「「「「「え？」「」「」「」

ナギは凶星を突かれ目を見開き、周りは驚きの声を上げる。

「気付いているんだろ？お前の中にある恐怖…」。

今まで人を傷付け、殺した自分の魔法に対する恐怖…」。

人を容易く殺し、傷付けるしか能の無い魔法を使っているという恐怖…」。

そして…！

それを今まで平然と行っていた自分に対する恐怖…！！」

「ち、違う！俺は怖くなんか無い！」

「じゃあ何故…？」

先刻俺を攻撃しなかった？」
さっき

「！そ、それは…。」

「ナギ！退け！！」

ちっ！詠春め…。話の途中に割って入るとは…。

「黙ってる…。小僧…。」

「ふごお！？」

ギイイ…。ガチャン！

俺は瞬時に形成（O・S）した『ナンナズ・クラウン』で詠春に猿轡をはめ、縄で縛り、見せかけだけの『鉄の処女（中に棘が無い）』に閉じ込める。全部俺の巫力で出来てるから壊せませうん！

「詠春！」

アルビレオが名前を呼ぶ。

「つの野郎お！！」

ラカンがよく練り込まれた気を拳に乗せて攻撃してくるが、俺はそれを巫門遁甲で受け流し、ラカンの頭を掴み、部屋の奥の壁上部に投げて、叩き付けられる。

「止さんか！ラカン！！」

ゼクトエ…。お前、止めるのが遅えよ…。

「え、詠春！ジャック！」

ナギが叫ぶが、俺は更にナギに近づき精神的に追い詰める。

「ナギ・スプリングフィールド…。お前が魔法を使わなかったから、大切な仲間が二人もやられたぞ？」

「そ、そんな…。俺は、俺は…。」

…ここまでで良いや。

「…はあ…。…さっさとお姫様二人と、お前の仲間を連れてズラかるぞ。」

「……は？」

ゼクト、ナギ、アルビレオが間抜け面になる。そりゃそうだろう。敵意剥き出しで、シリアス風吹かせてたのに、急に「一緒に逃げるぞお。」なんて、フリーダム過ぎる。

「葉真！妾を早く抱っこするのじゃ！」

テオがこちらに両手を向けながら催促してくる。
ナギ達は啞然としている。

「ハイハイ。分かりましたよ。」

言いながら、テオをお姫様抱っこする。

「っ？！馬鹿者！妾が何時お、おおお姫様抱っこでなどと言ったのじゃ！！」

顔を真っ赤にし、俺の胸板をポカポカ叩きながら訴えるテオ。

「え？言っただじゃないか。」

俺の妄想の中で。」

「現実の話をしろおおオオオオオオ！！」

俺のボケに自分の口調を忘れる程動揺しながらツツコミを入れてくるテオ。

「……」

ナギやアリカ王女、ゼクト、アルビレオもテオの姿に絶句しているようだ。

「おい、アルビレオ？なあ？これに乗れば良いの？」

「えっ？あ、え、ええ。それに乗っていただければ結構です…。」

壁に出来た風穴のすぐそばに有る飛空艇を指差しながら、質問する俺に、思考の海から戻ってきたアルビレオが答える。

恐らくタカミチとガトウが運転しているであろう飛空艇に俺はテオと共に先に乗り込んだ。

そして、俺達を乗せた飛空艇はあの有名な掘っ立て小屋へと向かった。

圧倒／対話／説教？（後書き）

やあやあ葉真君！君には次回！死ぬ気で働いてもらおうよ！！

「…いつか訴えてやる。」

好きにどうぞ！

「イライラする！！うがアああ！！」

あつ…。どっか行つた。まいつか！今回はナギと一緒に次回予告d
「次回！俺達が活躍するから！絶対に見てくれ！！というわけで、
次回！お楽しみに！！」

…今度はナギに取られたアああ！！！！うわアああアあああん！！

「今度は作者が消えたか…。」

「おつ！姫さん！一緒に言おうぜ！！」

「…。」

ばチィん！！

「へぼあ？！！」

「…意見や感想を、期待して待つておる。
皆、次回までさらばじゃ！！」

御意見、御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6475x/>

ちょ！勝手につけんな？

2011年11月6日02時55分発行